

八尾市文化財調査報告42
平成11年度国庫補助事業

八尾市内遺跡平成11年度発掘調査報告書 I

2000. 3

八尾市教育委員会



八尾市文化財調査報告42
平成11年度国庫補助事業

八尾市内遺跡平成11年度発掘調査報告書 I

2000. 3

八尾市教育委員会

はじめに

八尾市は、大阪府のほぼ中央部に位置し、生駒山地西麓から大阪平野の東部にかけての範囲に市域を有しております。古くは、河内湖、河内潟に面し、旧大和川をはじめとする多くの河川によって、肥沃な平野が形成されてきました。ここには旧石器時代から連縄と遺跡が形成されており、全国的にも有数な遺跡の宝庫と呼べる地域あります。

本書には、当教育委員会が市内の個人住宅建設をはじめ、民間の各種事業の工事等に伴って実施した遺構確認調査の成果を収めております。奈良時代の柱穴を検出した郡川遺跡や縄文時代後期前半の包含層を確認した高安古墳群、弥生時代後期の土器集積を確認した東郷廃寺をはじめ、多くの新たな知見を得ることが出来ました。

今後、市内の貴重な埋蔵文化財が、市民の方々をはじめ、多くの人々に親しまれるよう、保存・活用していくことが、重要な課題となるでしょう。本書が、その役割の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、今回の調査に際し、深いご理解とご協力を賜りました関係各位に感謝いたします。

平成12年3月

八尾市教育委員会

教育長 森 卓

例　　言

1. 本書は、八尾市教育委員会が平成11年度に国庫補助事業として、八尾市内で実施した遺構確認調査の報告書である。
2. 調査にあたっては、八尾市教育委員会社会教育部文化財課 米田敏幸、酒井、吉田野乃、吉田珠己、藤井淳弘が担当した。
3. 本書には、巻末に記載した調査一覧表のうち、特に成果のあった調査の概要を収録した。
4. 本書の作成にあたっては、酒井、吉田野乃、吉田珠己、藤井淳弘が執筆を行い、文責はそれぞれ文末に記した。編集は藤井が行った。
5. 調査一覧表及び抄録の作成は藤井が行った。



図. 八尾市の位置

本文目次

はじめに・例言	1
1. 郡川遺跡（99-104）の調査	4
2. 小阪合遺跡（99-320）の調査	6
3. 成法寺遺跡（98-502）の調査	8
4. 高安古墳群（99-252）の調査	13
5. 東郷廃寺（99-205）の調査	23
6. 中田遺跡（98-186）の調査	26
7. 中田遺跡（98-512）の調査	28
8. 西郡廃寺遺跡（99-146）の調査	30
9. 東弓削遺跡（98-572）の調査	32
10. 水越遺跡（99-342）の調査	37
11. 八尾南遺跡（99-332）の調査	40
調査一覧表	43

図版目次

図版 1	郡川遺跡（99-104）の調査
図版 2	高安古墳群（99-252）の調査
図版 3	西郡廃寺遺跡（99-146）・東弓削遺跡（98-572）の調査
図版 4	郡川遺跡（99-104）・高安古墳群（99-252）出土遺物
図版 5	成法寺遺跡（98-502）出土遺物
図版 6	東郷廃寺（99-205）出土遺物
図版 7	西郡廃寺遺跡（99-146）出土遺物
図版 8	東弓削遺跡（98-572）出土遺物
図版 9	水越遺跡（99-342）・八尾南遺跡（99-332）出土遺物

1. 郡川遺跡（99-104）の調査

1. 調査地：郡川5丁目24番1の一部

2. 調査期間：平成11年7月5・12日

3. 調査方法

住宅建築に係る浄化槽部分を対象として、約1m×2.15mの調査区を設定し、地表下1.7mまで調査を行い、さらに建物基礎の深い部分について立会調査を実施した。現地表はT.P+41.8m前後である。

4. 調査概要

6世紀から8世紀にかけての遺物と3つの造構築箇面を検出した。

第1面は地表下0.5~0.55mの⑦層上面（T.P+41.3m前後）で土坑を検出した。土坑は東側が調査区外にのびるが、南北の長さ2m以上、東西の長さ0.85m以上、深さ0.12mを測る。埋土は淡茶灰色粘質シルト（1mm大の砂粒を含む）で、土師器片及び須恵器壺片、杯片等が出土している。

第2面は地表下0.6m前後（T.P+41.2m前後）の第1面の土坑底で柱穴を検出した。平面プランは隅丸の長方形であり、一部は区外にのびるが、南北辺約0.7m、東西辺0.5mと推定される。本来の造構築箇面は第1面と同じ⑥層あるいはこれより上部にあったと考えられる。埋土は3層に分けられ、Ⅲ層中には握り拳大の礫が含まれていた。また、Ⅲ層中からは土師器壺や須恵器蓋杯片に混じって弥生土器片が出土している。この柱穴には長さ約71cm、幅22~25cmの柱根が残存していたが、柱根底部から8cm上部にはえぐりがまわっている。

第3面は建物の深い基礎部分の立会調査において断面で確認したものであるが、土層の関係から3面とした。造構は地表下0.85m前後の⑩層（T.P+40.95m前後）を切り込むピットで、幅0.3m以上、深さ0.18mを測り、埋土より土師器片が出土している。

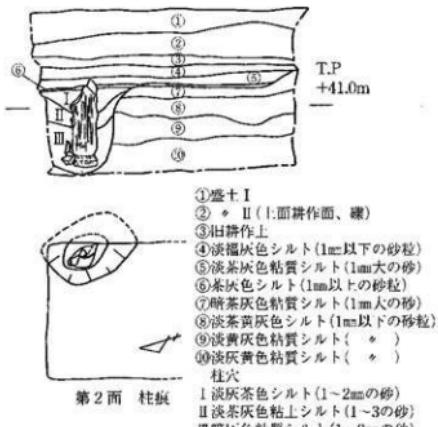
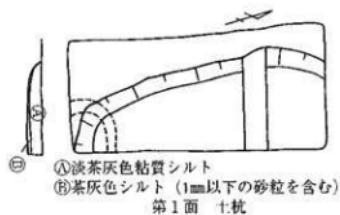
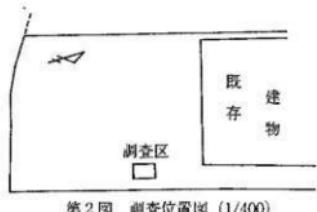
5. 出土遺物

図化した遺物は8点である。(1)須恵器壺、(2)鍔釜は第1面の土坑から出土したものである。(3)土師器碗(4)鍔釜、(5)須恵器杯蓋は土坑底面となる⑥層から出土した。(6)弥生土器の壺底部は柱穴Ⅲ層、(7)高环脚部は⑤層、(8)弥生土器壺底部は⑨層からの出土である。

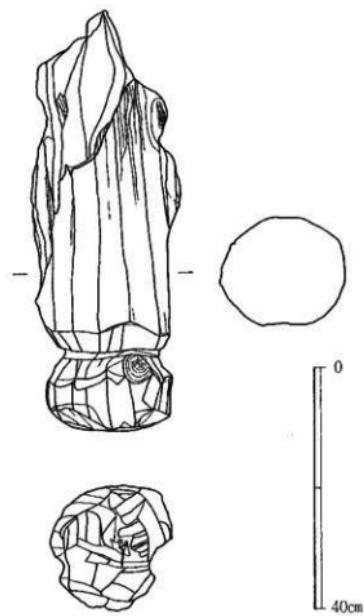
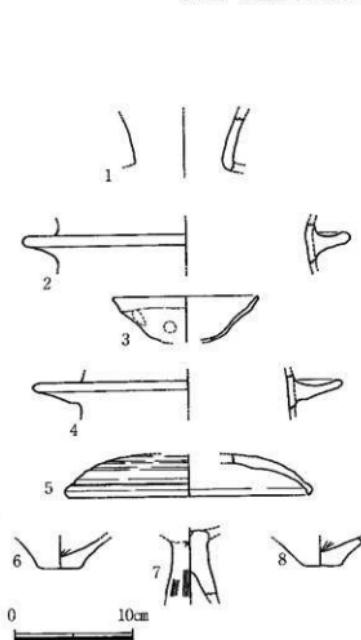
(沿)



第1図 調査地周辺図 (1/5000)



第4図 東壁上層断面図 (1/40)



第5図 出土遺物実測図 (1/4)、(柱痕1/8)

2. 小阪合遺跡（99-320）の調査

1. 調査地：八尾市青山町4丁目227

2. 調査期間：平成11年11月11日

3. 調査方法

分譲住宅建設に伴う宅地造成工事に先立ち、人孔設置箇所に $2 \times 2\text{m}$ の調査区を設定し、地表下1.8mまで重機と人力を併用して調査を行った。

4. 調査概要

地表下1.0m前後で旧耕土がみられ、地表下1.3mの淡黄灰色膠混粘質土層の直上で陶器・土師器の破片が出土し、中世～近世の包含層もしくは整地層と考えられる。また地表下1.6～1.8mの黄褐色混黄灰色粘質土層内より、弥生土器の甕が出土した。調査範囲が狭いため遺構は確認できなかったが、弥生時代後期の包含層と考えられる。

5. 出土遺物

図化できた遺物は、弥生土器の甕1点のみである。外面はナナメおよびヨコ方向のタタキが施されている。口縁部および内面は磨滅が激しく不明であるが、内面の一部にヘラナデと思われる調整がみられる。

6.まとめ

明確な遺構は検出できなかったものの、弥生時代後期の包含層が確認できた。今回の調査区の50mほど北側で平成9年度に当教育委員会が行った調査（97-175調査区）でも、ほぼ同じレベルで弥生時代後期の包含層がみられること、また東側50mの地点でも同時期の弥生土器が出土していることからみても、この周辺一帯に弥生時代後期の集落域が広がっていたと考えられる。

（吉田珠己）

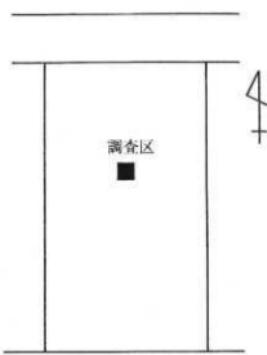
【参考文献】

八尾市教育委員会『八尾市内遺跡平成9年度発掘調査報告書Ⅰ』1998年

（財）八尾市文化財調査研究会「小阪合遺跡（第19次調査）」「八尾市埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ」1993年



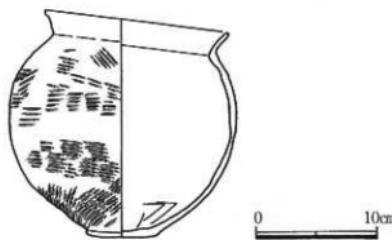
第6図 調査地周辺図 (1/5000)



第7図 調査区設定図 (1/600)



第8図 土層模式図 (1/40)



第9図 出土遺物実測図 (1/4)

3. 成法寺遺跡（98-502）の調査

1. 調査地：八尾市高美町1丁目16-4
2. 調査期間：第1区 第2区 平成11年1月25日
第3区 平成11年1月27・28日

3. 調査方法

施工予定地の中央に2m四方の調査区を設定し（第1区）、地表下2.1m前後まで確認した。さらに東側に1.5m四方の調査区を設定し（第2区）、包含層の上方まで掘削してその深度を確認した。第1区で遺構・包含層が確認されたため、これに東接して第3区を設定し、遺構・包含層の範囲の確認を行った。

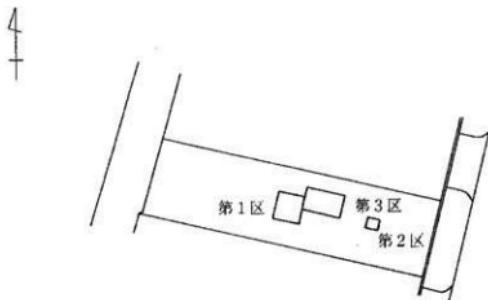
4. 調査概要

【第1区】地表下0.4m～1.0mで13世紀頃を下限とする瓦器片、土師器片を含む茶灰褐色粘砂層を確認した。この土層は3層に分かれ（5層、6-A・6-B層）、6-A・6-B層は炭泥じりで遺物が比較的密に含まれていた。さらにこの包含層直下の地表下0.8～1.0mの茶灰青褐色粘砂層（8層）上面を切り込む土坑状遺構を断面で確認した。この土坑は東壁断面にかかった状態で確認した。最大検出長1.24m、最大深0.32mを測る。埋土は灰紫色炭泥粘質土である。埋土内から須恵器の壺蓋（1）、土師器の高杯（2～4）、不明石製品（5）が出土した。須恵器の壺蓋（1）は天井部外面に手持ちヘラケズリを行うことを特徴とするが、口縁部の開きを始めとする器形のあり方から、TK47～MT15型式期のものとみられる。土師器の高杯（2～4）も概ね6世紀前半代のものとみられる。5は用途不明の石製品で内外面及び両端面は研磨により平滑になっている。この遺構面の下については地表下2.1mまで確認した。褐灰橙色粘性微砂層（9層）を経て、灰青色微砂層・暗灰青色有機物混粘土層（10・11層）が続くが、遺物は確認できなかった。

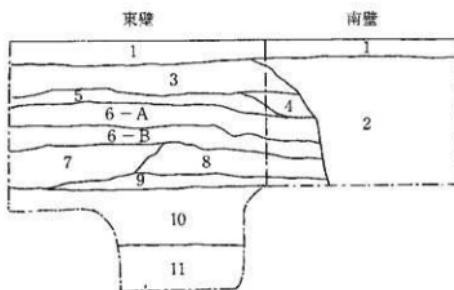
【第2区】地表下0.6m前後まで確認した。地表下0.44m以下で第1区において確認した鎌倉時代の包含層である5層を確認した。
(吉田野乃)



第10図 調査地周辺図 (1/5000)

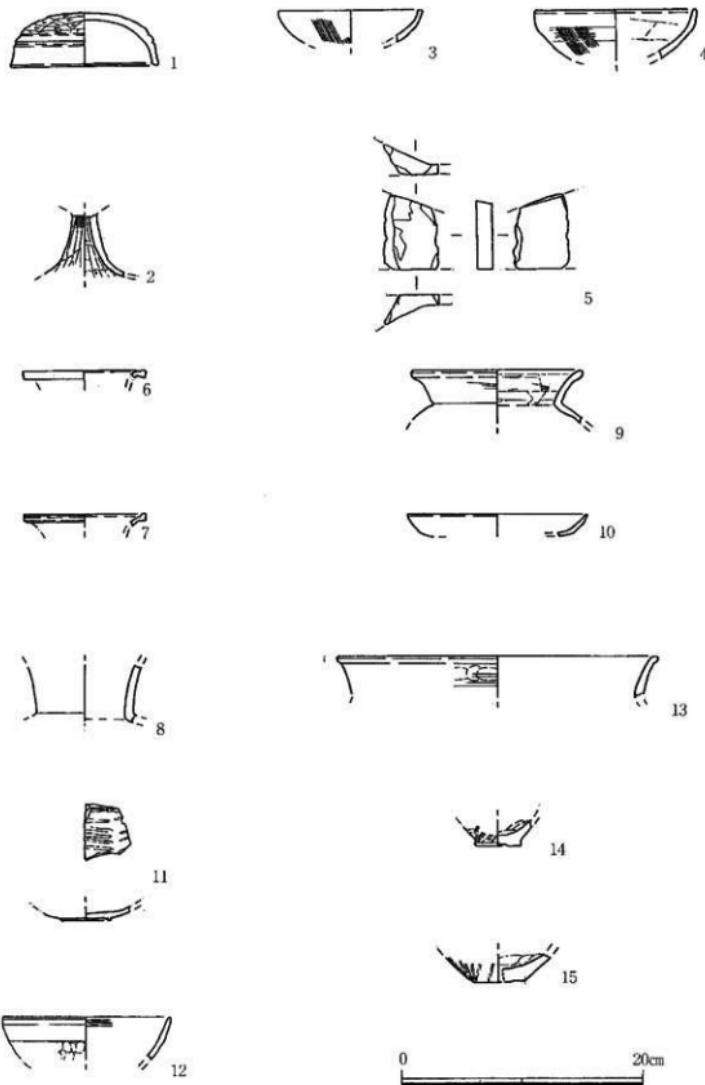


第11図 調査区設定図 (1/400)

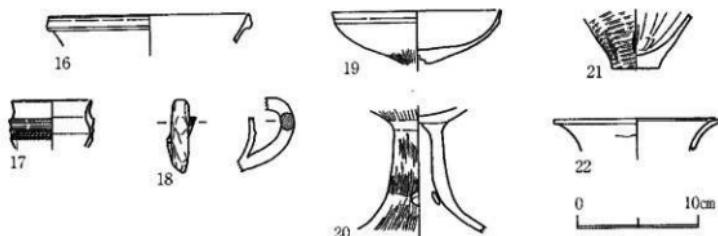


1. 現代盛土A層
2. 現代攪乱層
3. 現代盛土B層
4. 灰青茶色粘砂層
5. 茶灰褐色粘砂層（土器片含む）
- 6 - A. 淡茶灰褐色粘砂層（灰泥、瓦器片、土師器片含む）
- 6 - B. 同上色調やや暗、粘性大（灰泥、瓦器片、土師器片含む）
7. 灰紫色灰混粘質土層（古墳時代後期、上杭状遺構埋土）
8. 茶灰青褐色粘砂層
9. 褐灰色粘性微砂層
10. 灰青色微砂層
11. 暗灰青色有機物混粘土

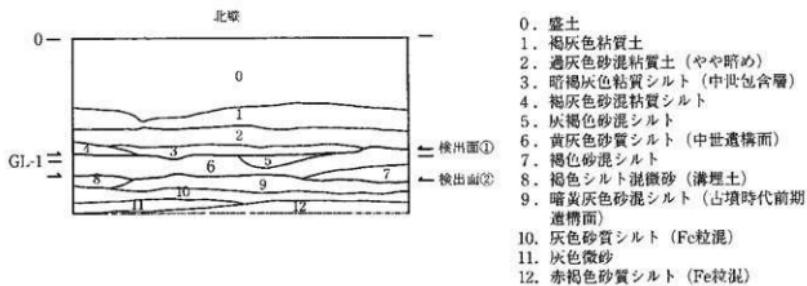
第12図 調査区土層断面図 (1/40)



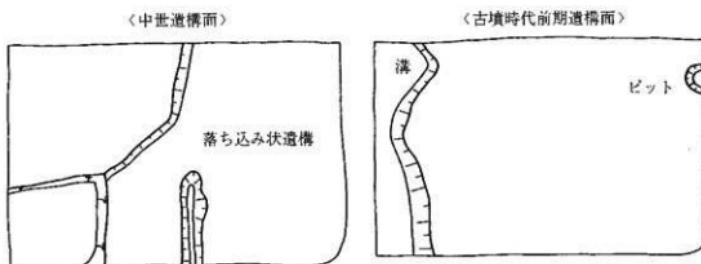
第13图 出土遗物实测图 (1/4)



第14図 出土遺物実測図 (1/4)



第15図 第3区土層断面図 (1/40)



第16図 第3区遺構平面図 (1/40・上が北)

[第3区] 第1区の西側に設定した東西3m、南北2mの調査区である。

地表下0.85m～0.95mの暗褐色粘質シルト層（第3層）が中世の包含層となる。出土遺物としては、9世紀の須恵器（6～8）、土師器甕（9）・皿（10）、13世紀の瓦器（11・12）、混入品と思われる弥生時代V様式の甕底部（14・15）がある。そして、地表下0.95mの黄褐色砂質シルト層上面において、中世の遺構を検出している。調査区の一部が搅乱を受けていたものの、落ち込み状遺構を検出している。深さ0.1mを測る。出土遺物としては、白磁碗（16）、須恵器甕（17・18）、瓦器、土師皿、土師器の破片がある。

以下、中世遺構面のベース層が第2面の遺物包含層となり、地表下1.15mの暗褐色砂泥シルト層が弥生時代後期末～古墳時代前期にかけての遺構検出面となる。検出した遺構は、溝の一部とピット1基である。出土遺物は、土師器等を含むすべて破片で、遺物包含層より団化できたのは、高杯（19・20）・甕底部（21）、溝より広口甕（22）がある。
(藤井)

成法寺跡(98-502)出土遺物観察表

出土地	種類	番号	器種	部位	径(cm)	現高(cm)	調整・手法	色調	焼成	胎土	備考
第1区 第1面 遺構1	須恵器	1	坪壠	天井部～口 縁部	12.0	4.4	天井部外面一手持ちヘラケズリのちナ デコ縁部外面一ロクナデ 内面一ロコナデのち仕上げナ	青灰色	硬	粗	
	土師器	2	高杯	脚部		5.3	外面一タテハケ(8本/cm)のちタテ ヘラ さき牛 内面一ヘラケズリのちユビナデ	橙色	やや硬	やや粗	
		3	甕	口縁～体部	12.0	2.6	外面一タテハケ(7本/cm)のち横方 向ナデ 内面一横方向ナデ	橙色	軟	やや粗	
		4	高杯	脚部	13.4	4.0	外面一タテハケのちヨコハケ 内面一ヨコハケ	橙色	軟	普通	
		5	石製品					乳白色			
第3区 第3層	須恵器	6	壺	口縁部	10.0	0.7	外外面一ロコナデ	暗青灰 色	きわめ て硬		
		7	壺	口縁部	10.0	1.0	外外面一ロコナデ	灰色	硬	極めて 粗	
		8	壺	頸部 (頸部径) 7.0			外外面一ロコナデ	灰色	硬		内面に自然 釉付層
土師器	9	甕	口縁～肩部	13.8	4.4	外面一ヨコハケのちナデ 内面一ヨコハケ	明赤褐 色	普通			
		10	皿	口縁～体部	14.8	1.8	口縁部外面一内面一横方向ナデ	黄褐色	やや軟	やや良	
		11	楕	底部 (底径) 4.1			外面一高台點付けに伴うユビオサエ のちナデ 内面一平行ヘラミガキ	灰色		やや粗	
瓦器		12	楕	口縁～体部 (口径) 13.5	3.4		外面一ユビオサエ、ナデ 内面一横方向ヘラミガキ	灰色	やや軟	良	
		13	羽釜	口縁部	26.0	3.4	外面一ユビオサエのちナデ 内面一ナデ	赤褐色	やや硬		
		14	甕	底部	3.8	2.1	体部外面一タタキのちナデ、ユビオサエ 底部外面一板ナデ 内面一ユビオサエ	橙色	普通	やや粗	
弥生土器		15	甕	底部	3.8	2.3	体部外面一タタキのちナデ 底部外面一板ナデ 内面一ナデ	暗褐色	やや硬	やや粗	
		16	白磁	口縁	16.4	2.5	外外面一ロコナデ	白色	硬	精緻	
		17	須恵器	口縁～体部	6.6	4.0	外外面一ロコナデ	灰色	硬	精緻	
第3区 第1面 落ち込み		18	把手付 甕	把手	—	6.0	外外面一ロコナデ	灰色	硬	良	
	弥生土器	19	高杯	脚部	14.0	4.4	外面一タテ方向ハケ 内面一不明	黄褐色	やや軟	良	
		20	高杯	脚部	—	10.0	外面一タテ方向ヘラミガキ 内面一ナデ	赤褐色	普通	良	
		21	甕	底部 (底径) 4.0			体部外面一タタキのちナデ 底部外面一板ナデ 内面一ナデ	赤褐色	やや軟	良	
第3区 第2面 溝		22	直口甕	口縁	14.0	2.6	外外面一ナデ	淡褐色	やや軟	良	

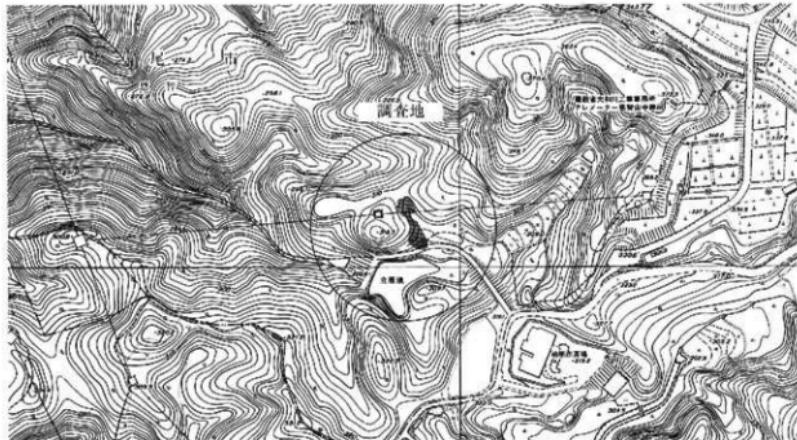
4. 高安古墳群（99-252）の調査

1. 調査地：八尾市恩智1734-2
2. 調査期間：平成11年8月24日～30日（遺構確認調査）
平成11年9月7日～17日（立会調査）

3. 調査方法

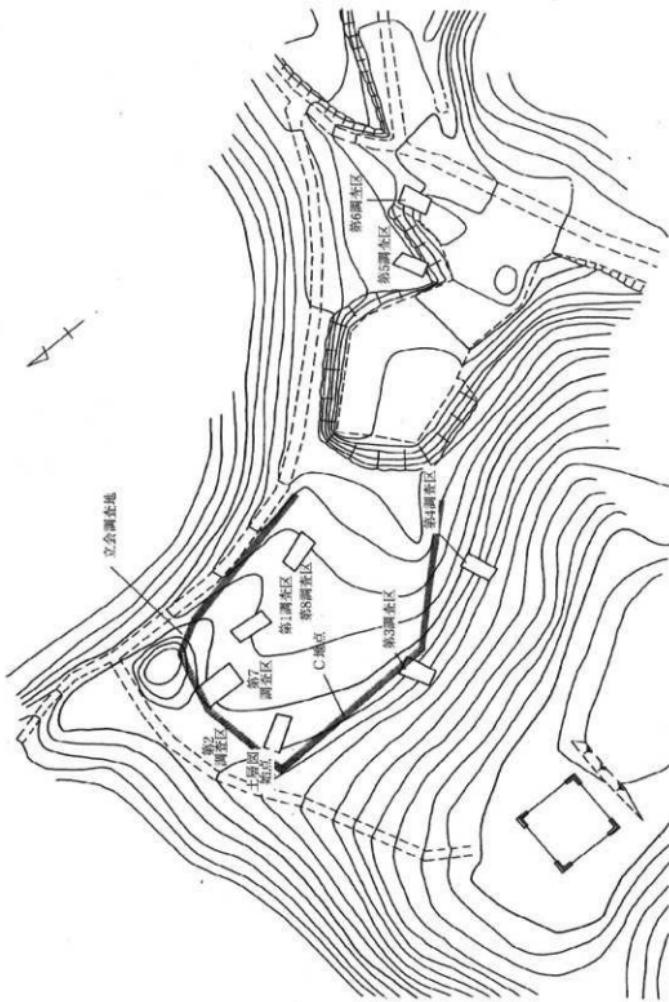
本調査は㈱関西電力による鉄塔建設工事の仮設道設置に伴う遺構確認調査及び立会調査の報告である。鉄塔本体工事に伴う遺構確認調査は平成10年度に行い、時期不明のピット、土坑、溝を地山層直上で検出している。本調査地は鉄塔本体工事予定地の東側にあたり、南東方向に傾斜をなして開く谷地形である。仮設道設置工事の内容は傾斜地の上方と下方の一部は切土を、間に挟まれた人為的な切土による窪地部分は盛土を行うというものであった。切土は最大で深さ1mに達する。このため切土部分に計8箇所（第1～第8調査区）の調査区を設定し、切土の深さ位まで遺構確認を行った。各調査区の大きさ

調査区名	調査区の規模	調査区の設定理由
第2調査区	1.4×2.3m	鉄塔本体工事予定地の立地する尾根と谷地形を挟んで東側の尾根との間を北東方向に延びる陸橋状の地形であり、山城等の施設の可能性が考えられたため。
第7調査区	2.7×3.4m	
第3調査区	1.5×2.8m	鉄塔本体工事予定地の立地する尾根の東端部分。この尾根上には遺構が存在しており、人為的な地形改変等の痕跡の有無を確認するため。
第4調査区	1.3×2.6m	
第1調査区	1.2×3.0m	谷地形の北側上方。谷地形と東側の尾根との間に不自然な尾根状の地形が東側尾根と平行して延びており、現況の道が作られた際に東側尾根斜面を削平して盛った痕跡かとみられたが、古い時期の人為的改変の痕跡である可能性も考えられたため。
第8調査区	1.3×3.0m	
第5調査区	1.3×2.7m	東側尾根部分の裾の緩傾斜地であり、遺構の存在が予想されたため。
第6調査区	1.6×2.6m	



第17図 調査地周辺図 (1/5000)

第18図 調査区設定図 (1/400)



さと設定理由は表のとおりである。遺構確認調査のうち谷地形北側上方部分の切土工事について立会調査を行った。

4. 調査概要

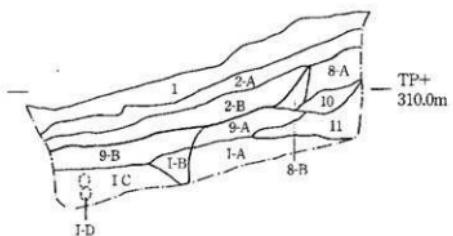
〔第2調査区〕陸橋状地形の主軸に直交する方向に調査区を設定した。現地表はTP+310.7~309.9m前後で西から東方向へ傾斜する。腐植土層、流入土層である灰黄色粘性砂質土層(2-A層、2-B層)を除去すると、灰黄褐色粘質土層等(8-A・8-B・9-A・9-B層)よりなる比較的硬質な面を検出した。上面に遺構等はみられなかった。土層断面を観察すると、地山層である花崗岩の風化した地盤である暗灰黄色粘性微砂層(I-A・I-B・I-C層)の上に、地山起源の砂をブロック状に含む粘質上、粘砂層が数単位みられ、土層断面を観察する限りでは、ほぼ水平な面をなす地山の上に人为的盛土がなされている可能性が考えられる。この盛土により構成されている可能性のある傾斜面はTP+310.35~309.5mの北西から南東方向の傾斜面であり、断面の北西側では上方に向かって、傾斜を強めて立ち上がりっている様子を示している。遺物は全く確認できず、時期を判断する材料はないが、陸橋状地形が人为的な盛土によるものである可能性を確認できた。

〔第3調査区〕鉄塔建設予定地の尾根の東斜面から裾にかけての位置に等高線に主軸が直交する調査区を設定した。現況はTP+310.9~309.7m前後で南西から北東方向へ傾斜地する。腐植土層及び流人土層である2-A・2-B層を除去すると、黄灰色粘砂層(12層)よりなる比較的硬質な面を検出した。この面は傾斜面の南西側上方がTP+310.34m付近で平坦になっている。上面を精査したところ、この平坦部分で径0.3m、深さ0.05~0.06mのピット状の遺構を検出した。埋土は淡灰茶色粘砂層である。出土遺物は確認できなかった。また北壁断面においても、12層より構成される傾斜面上方の平坦面で、灰白褐色粘質土層(①層)の切り込みを確認しており、遺構埋土の可能性がある。12層は地山とみられる黄灰色粘質土層(Ⅱ-A・Ⅱ-B層)の上に載るが、人为的盛土であるか否かは判然せず、地山の可能性も残る。また本調査区では出土遺物は確認できなかった。本調査区で確認したTP+310.34m付近の平坦面は人为的なものであることはほぼ確実とみられるが、その構築時期、性格については判然としない。

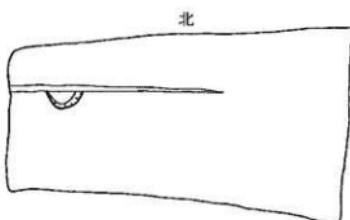
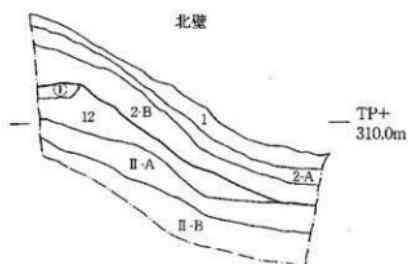
〔第4調査区〕鉄塔建設予定地の尾根の東斜面から裾にかけての位置に等高線に主軸が直交する調査区を設定した。現地表はTP+310.7~309.5m前後で南西から北東方向への傾斜する。腐植土層、及び流入土層である2-A・2-B層を除去すると、地山層である黄褐色微砂質粘砂層(花崗岩風化状)(Ⅲ層)の傾斜面を検出した。上面を精査したが、遺構は確認できなかった。北壁断面では上方西側のTP+310.32m付近でⅢ層の傾斜面が平坦になっているのが、一部観察できた。これが、平坦面として西側に続くものであれば、第3調査区で確認した平坦面との関連が注意されるが、判然としない。また、本調査区では出土遺物は確認できなかった。

〔第7調査区〕陸橋状地形の主軸と直交方向に調査区を設定した。当初、幅1.7m、長さ3.4mの調査区を設定したが、遺構の検出に伴い、西側に幅を拡張して2.7m幅の調査区とした。現況は北側がTP+310m前後、南側が309.9m前後ではほぼ平坦である。腐植土層及び流入土層である2-A層を除去し、この下の暗灰茶色粘性砂質土層(3-A・3-B層)上面で精査を行ったが、遺構は確認できなかった。3-A・3-B層を除去し、地表下0.5~0.65m前後、TP+309.2~309.04mの灰黄褐色粘砂層(13層)上面で精査を行ったところ、調査区北側で上坑状遺構を検出した。これは調査区の北壁と西壁にかかる状況での検出であったため、全形は不明である。検出最大東西幅1.9m前後、最大深度0.19mを測る。埋土は淡灰茶色疊混粘砂層(②層)で、径30cmまでの砾を比較的密に含み、硬質である。埋土内には遺物を全く確認できなかった。この上坑状遺構のベース層である13層については、灰黄白色粘砂をブロックとして含むことから、地山ではないと考えた。地山層はこの下の淡灰茶色疊混粘質土層(IV-A・IV-B層)である。この土層は粘性が高く、硬質であるが、土坑埋土の②層と類似している。このことからこの上坑は地山層を掘り返して、埋めたものとみられる。その性格については、掘り込み事業等の痕跡の可能性もあるが、判然としない。

〔第1調査区〕東側尾根との間の不自然な尾根状地形部分の傾斜方向である南東方向に主軸が平行する



第19図 第2調査区 西壁土層断面図 (1/40)



第20図 第3調査区 平面・土層断面図 (1/40)

〔流入土・包含層等〕

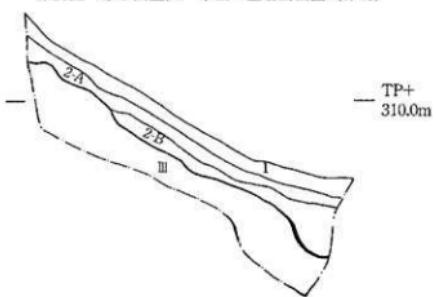
1. 腐植土層
- 2-A. 灰黄色粘性砂質土層 (第1トレンチで上器小片出土)
- 2-B. 同上 砂多 粘性少 (炭混)
- 8-A. 淡灰褐色粘質土 層 (地山起源の人为的盛土層とみられる土層)
- 8-B. 同上 色調濃 粘性大
- 9-A. 淡灰黄色粘砂層 (地山起源の微砂をブロック状に含む)
- 9-B. 同上 砂多
10. 黄灰褐色粘質土層 (砂ブロック混)
11. 淡灰黄色粘質土層
12. 黄灰色粘砂層 (灰白褐色粘土ブロック混、地山起源の土層による人为的盛土か、地山か判然せず。)

〔地山層〕

- I-A. 淡暗灰黄色粘性微砂層
- I-B. 暗淡灰黄色粘砂層
- I-C. 暗灰黃茶色粘砂層 (花崗岩風化状)
- I-D. 灰黄褐色粘土
- II-A. 黄灰色粘質土層
- II-B. 同上 粘性大 硬質
- III. 黄褐灰色微砂質粘砂層 (花崗岩風化状)

〔遺構埋土〕

- ①. 灰白褐色粘質土 (第3トレンチ、ピット状遺構埋土)



第21図 第4調査区 西壁土層断面図 (1/40)

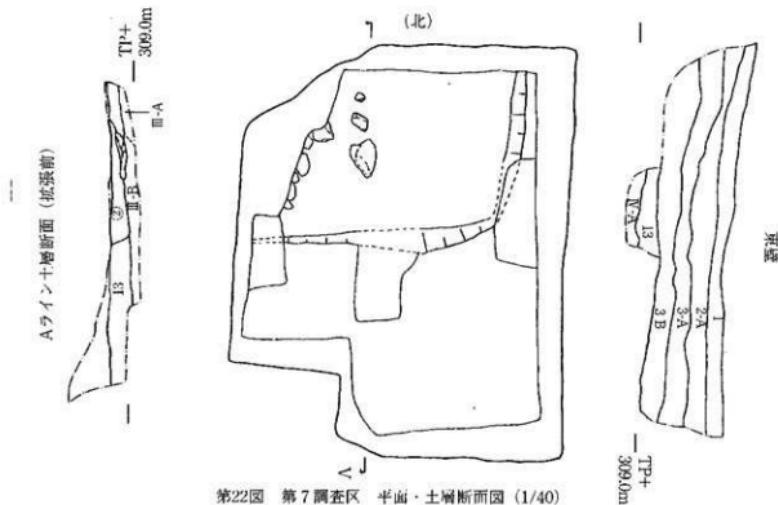
調査区を設定した。なお第1調査区の北側には測量図ではマウンド状の高まりがみられるが、現地では明瞭なマウンドが認められず、切土の範囲から外れていたため、この部分の南側に調査区を設定した。なお測量図上の第1調査区の位置は尾根状地形主軸線よりやや西寄りであるが、これは現地踏査での地形認識を基に設定しているためであり、測量図に調査区設定をおとしむ際の平板測量の誤差も考えられる。現地表は北側がTP+309.5m前後、南側が309.35m前後で北から南へ僅かに傾斜する。腐植土層及び流入上層である2-A層を除去した。2-A層には中世以降かとみられる土器片が僅かに含まれていた。この下の地表下0.25~0.3m前後、TP+309.05~309.2m前後の暗灰茶色粘性砂質土層（3-A層）面で精査を行ったところ、調査区南よりで径0.62mのピットを検出した。この下は上暗灰茶色粘性砂質土層（3-A層）で、さらにこの下で淡灰茶色粘砂層（4-C層）を確認した。いずれも遺構面は検出できず、遺物は確認できなかった。本調査区では3-A層上面で中世以降とみられる遺構面を確認した。

〔第8調査区〕 第1調査区の南側に設定した調査区である。この調査区も第1調査区と同じく、不自然な尾根状地形部分の傾斜方向である南東方向に主軸が平行する調査区を設定した。現地表は北側がTP+309.1m前後、南側が308.75m前後で北から南へ僅かに傾斜する。層序は基本的に第1調査区と同様であり、腐植土の下に灰黄色粘性砂質土層（2-A層）があり、この下には暗灰茶色粘性砂質土層（3-A・3-B・3-C層）。さらにこの下で淡灰茶色粘砂層（4-C層）を確認した。いずれも遺構面は検出できず、遺物は確認できなかった。本調査区では3-A層上面で中世以降とみられる遺構面を確認した。

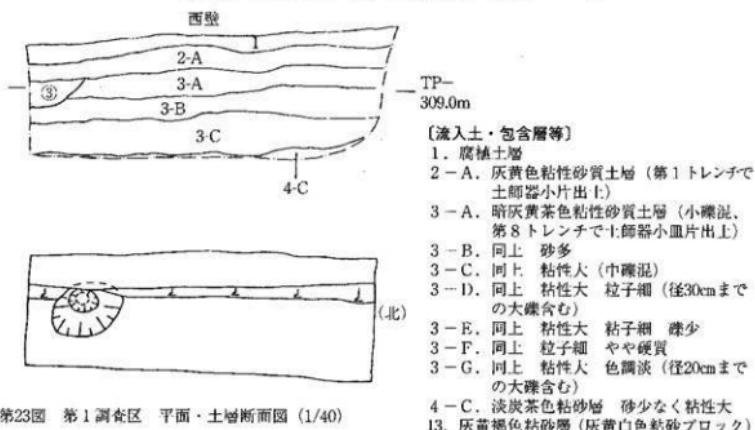
3-A層には中世以降とみられる土器片が若干量含まれていた。いずれも小片であり時期の特定は困難であった。本調査地では中世以降とみられる包含層を確認した。

〔第5調査区〕 谷地形の東側の尾根から南北方向に緩やかに張り出す緩傾斜地である。北東から南西方向を主軸とする調査区を設定した。現地表はTP+306.1m前後でほぼ平坦である。腐植土層の下は2-A層、2-B層、3-A層、4-A層、4-B層が地表下0.7~0.8m前後まで堆積する。上面精査を繰り返したが、遺構面は確認できなかった。出土遺物は2-B層より13世紀末から14世紀に位置付けられる土器器皿片(1)をはじめとする土器片が少量出土した。この下の地表下0.72~1.04m、TP+305.42m~TP+305.06m前後に堆積する淡灰茶色粘性土層（5-A層）より縄文時代中期から後期前葉とみられる土器片(3)が出土した。さらにこの土層付近からサスカイト剥片の小片(2)が出土した。この下には5-B層、5-C層、5-D層が堆積し、さらに下には5-E層が堆積する。5-B層、5-C層は、南から切り込む形で堆積し、5-E層は径28cm前後の礫を挟んで北側に堆積する。これらの土層は東壁に沿って部分的に筋掘りを行って確認したものであり、平面的な確認はできなかつたため判然としないが、堆積状況からは遺構埋土の可能性をもつ土層である。出土遺物は確認できなかつた。さらに下には淡灰茶白色粘砂層（6層）が地表下1.38m以上続く。6層においても出土遺物は確認できなかつた。本調査区では中世後期以降とみられる包含層、縄文時代後期とみられる包含層及び同期の遺構の埋土とみられる上層を確認した。

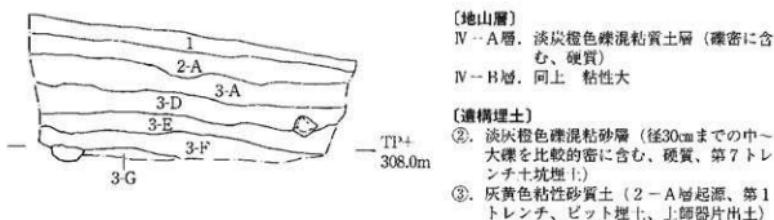
〔第6調査区〕 第5調査区で縄文時代後期の包含層等を確認したため、第5調査区の南側に第6調査区を設定した。第5調査区と同様の北東から南北方向を主軸とする調査区である。現地表はTP+305.85m前後であるが、南側は崖面をなしてTP+304.46m前後まで落ち込んでいる。腐食土層の下は地表下0.7m前後まで2-A層、4-A層、4-B層が堆積する。遺構、遺物は確認できなかつた。2-A層は現代の削平のうちに堆積したものである。地表下0.7~0.8m前後、TP+305.16m~305.0m前後で第5調査区において確認した縄文時代後期の包含層とみられる5-A層を確認したが、出土遺物は確認できなかつた。この下には5-B層が堆積しており、上面を精査したところ、土層の違いは確認できたが、輪郭は判然としなかつた。さらに地表下1.3m前後まで掘削し、壁面の土層断面の精査したところ、北壁と西壁で5-B層、5-C層が灰白褐色小礫混粘砂層（7-A層）から切り込んでいる状況を確認した。切り込み面は地表下0.9m前後、TP+305.0m前後の7-A層上面である。西壁で確認した切り込み面は急傾斜をしており、人為的な掘り込みとみられ遺構と認識される。東壁で一部深掘りを行ったところ、5-B層の下



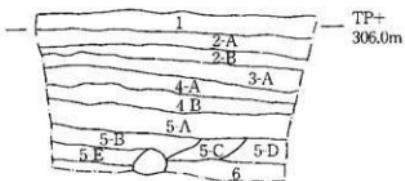
第22図 第7調査区 平面・土層断面図 (1/40)



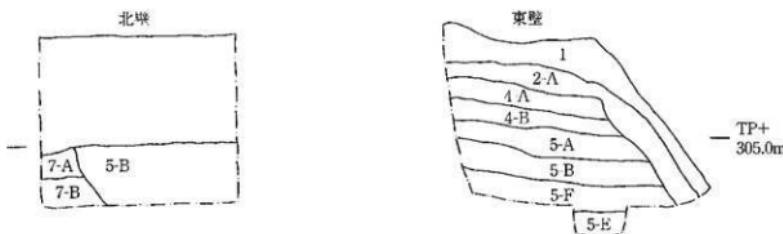
第23図 第1調査区 平面・土層断面図 (1/40)



第24図 第8調査区 東壁土層断面図 (1/40)



第25図 第5調査区 東壁土層断面図 (1/40)



(流入土・包含層等)

1. 腐植土層
- 2 - A. 灰黄色粘性砂質上層
- 3 - A. 暗灰黃茶色粘性砂質土層 (小礫混)
- 4 - A. 淡灰茶色粘砂層
- 4 - B. 同上. 砂多
- 5 - A. 淡灰茶色粘質土層 (第5トレンチで繊文土器片出土)
- 5 - B. 同上. 粘性大. 硬質
- 5 - C. 同上. 砂・小礫含む
- 5 - D. 同上. 砂ブロック若干混
- 5 - E. 同上. 砂少. 粘性大
- 5 - F. 同上. 粘土ブロック混 砂やや多
6. 淡灰茶白色粘砂層
- 7 - A. 灰白褐色小礫混粘砂層
- 7 - B. 同上. 小礫、砂多

第26図 第6調査区 土層断面図 (1/40)



第27图 立会湖窑区 I: 剖面图 (1/40)

には粘土ブロック混の5-F・5-E層が地表下1.3m以上続いており、この構造のベース層である7層は確認できなかった。さらに西壁では埋土は15cm前後と浅い。このことからこの遺構は南東側に向かって深くなっているものとみられ、調査区ではその北西脇の一部を検出したものとみられる。埋土内に遺物は確認できなかった。本調査区では縄文時代後期の包含層とみられる5-A層の下の面である7-H層から切り込む遺構を確認した。この遺構の時期については出土遺物が確認できていないものの、縄文時代後期の包含層とみられる5-A層と近似した土層が埋土であることから、同期のものである可能性は高い。またこの遺構の性格は判然としないが、5-B層、5-C層、5-D層は西側の第5調査区においても5-A層の下に確認しており、これに続くものであれば、東西7m以上の掘り込みとなる可能性もあり注意される。

[立会調査] 遺構確認調査の結果、谷地形上方では旧地形の人為的改変の痕跡、中世以降とみられる包含層を確認したものの、遺構・遺物は希薄であり、明確に遺構の時期・性格を決定づけることはできなかった。このためこの部分については工事中に立会調査を行うこととした。谷地形下方の東側傾斜地については、第5調査区、第6調査区において縄文時代後期頃とみられる包含層及び同期とみられる遺構が確認されたため、原因者と協議の結果、切上範囲を変更し、盛土内保存を行うことになった。以下、谷地形上方部分の立会調査の成果について記述する。

切土の断面部分の確認を行った。西壁北側部分は地山層の堆積であったが、南側で（第18図C地点）の炭、焼土を埋土とするビットを確認した。これは地表下0.7mの黄灰褐色粘質土層より切り込む。南北径0.5m、東西径0.3m、深さ0.16mを測る。出土遺物は確認できなかった。北壁から東壁にかけての部分では、地表下0.3m前後で地山層とみられる6-C層を切り込む2・3・B・4層が堆積しており、ここから土師器片が出土した（A地点—混入とみられる古墳時代中期頃の高环片、B地点—M.C.頃のへそ皿片）。これらは第1調査区、第8調査区で確認した中世以降とみられる包含層に相当するものとみられ、中世以降に地山を削平して整地等を行った痕跡を示すものかもしれない。

5.まとめ

中世以降とみられる包含層や、ビット状遺構、谷地形北側部分の人為的盛り土によるとみられる陸橋状の地形については、部分的な調査であるため確定できないが、谷地形を開いて北側に盛土を行うという人為的改変が行われた事を示すものかもしれない。断言はできないが、信貴山城に間連する施設の痕跡を示すものである可能性がある。第5・第6調査区で確認した縄文時代中期末から後期前葉とみられる上器片を出土した包含層及び遺構については注意される。縄文時代後期前葉頃の遺跡は生駒西麓では四条畷市更良岡山、東大阪市網手、同市日下、同市鬼虎川、八尾市忍智、柏原市大塚、安堂、国府等の遺跡がある。⁽¹⁰⁾ いずれも標高15~20mに立地する遺跡である。今回確認した遺構、包含層は標高305m前後の山地の南側斜面に位置する。この遺跡の性格については現段階では資料不足であるが、立地条件のみから判断する限りでは、定住集落ではなく、キャンプサイト的な性格を有するものであった可能性がある。西側山麓の恩智遺跡との関連が注意される。

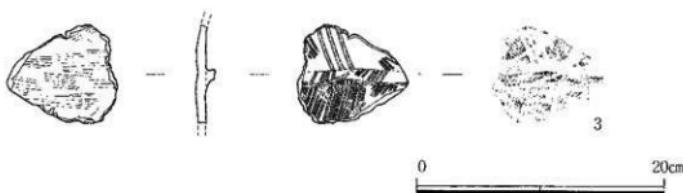
なお、第5調査区で出土した縄文土器の時期については、大阪府教育委員会文化財保護課大野薰氏にご教示いただきました。記して謝意を表します。

（吉田野乃）

（註） 大野薰 1997「生駒西麓域の縄文集落」『河内古文化研究論集』柏原市古文化研究会編

1

2



第28図 出土遺物実測図 (1/4)

98-252 (TK) 出土遺物観察表

出土地	種類	番号	器種	部位	径(cm)	現高(cm)	調整・手法	色調	焼成	胎土	備考
第5調査区 2-B層	土師器	1	皿	口縁～底部 の一部	7.5	1.4	口縁部外面一様方向ナデ 底部外面一 不定方向ナデ	鵝黃褐色	やや軟	やや良	
第5調査区 5-A層付近	サヌカイト	2		(最大径)	(最大厚)	1.55	0.2	片面に槌打によるリング、フィッシャー痕 みられる。	黒灰色		
第5調査区 5-A層	縄文土器	3	鉢	頭部～肩部	不明	7.9	外縁一横文のうち1部ナデ口縁部-3条 1組の沈線文を施す 内面一板状工具による横方向のナデ	茶褐色	やや軟	粗	縄文(LR)

5. 東郷廃寺（99-205）の調査

1. 調査地：八尾市桜ヶ丘2丁目234番-1の一部

2. 調査期間：平成11年8月9日

3. 調査方法

店舗付き学生寮の建設に先立ち、敷地内の建物建設予定箇所に3×3mの調査区を2か所設定し、それぞれ地表下2.6m前後まで重機と人力を併用して調査を行った。

4. 調査概要

第1調査区：地表下1.4mで、平面的には明確ではないが北壁の断面で落ち込み状の遺構がみられ、第1の遺構面が確認できる。この遺構の埋土から灰黄色微砂シルト層内からは、土師器の壺が出土した。また地表下1.5mの面から切り込むと考えられる落ち込みが、西壁部分で確認でき第2遺構面となる。さらに地表下1.6mでは、黄褐色砂混粘質シルト層から高杯5個体と壺2個体がまとめて出土している。これらは、高杯はほぼ完形であり、壺も残りがよく磨滅もそれほどしていないため、溝か土坑に投棄されたもの、もしくは住居跡の遺物の可能性も考えられる。出土遺物から、第1面・第2面は古墳時代の、第3面は弥生時代後期の遺構面になると考えられ、あわせて3面の遺構面が検出できた。

第2調査区：明確な遺構はないが、第1調査区で検出したいずれかの遺構面に対応すると考えられる黄褐色砂混シルト層が西側の地表下1.5mで確認できた。この遺構面は東側へは続かない。

5. 出土遺物

遺物は、第1遺構面の落ち込み状遺構の埋土から出土した土師器壺（1）が、また第3遺構面の土器集積の弥生土器（V様式）の高杯5個体（2~6）と壺2個体（7・8）がある。

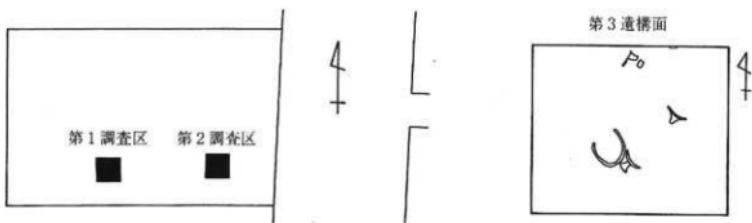
6. まとめ

今回の調査では平面的な遺構の性格が明確にできなかったが、西側および北西のこれまでの調査（第13次・24次・33次）において弥生時代後期の土坑や土器集積が検出されており、これらの遺構面の広がりの一端であると考えられる。
(吉田珠己)

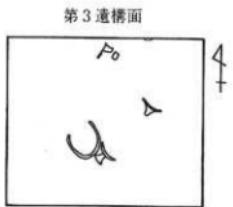
【参考文献】八尾市教育委員会『八尾市文化財紀要7』1995年



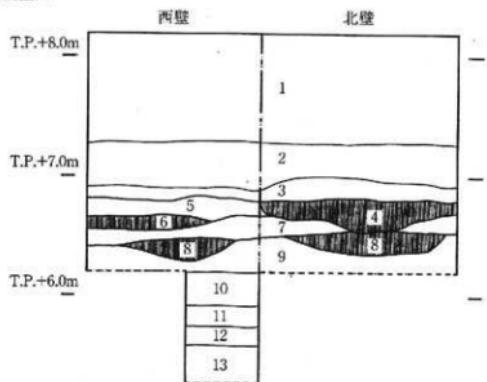
第29図 調査地周辺図 (1/5000)



第30図 調査区設定図 (1/600)

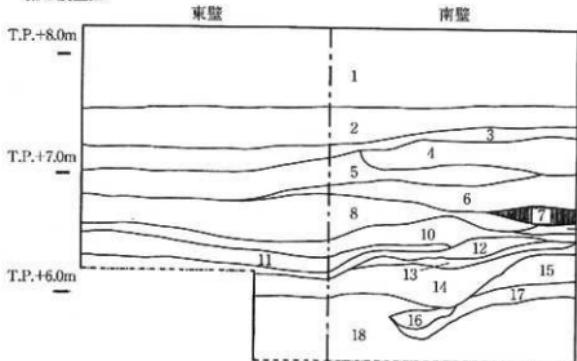


第1調査区



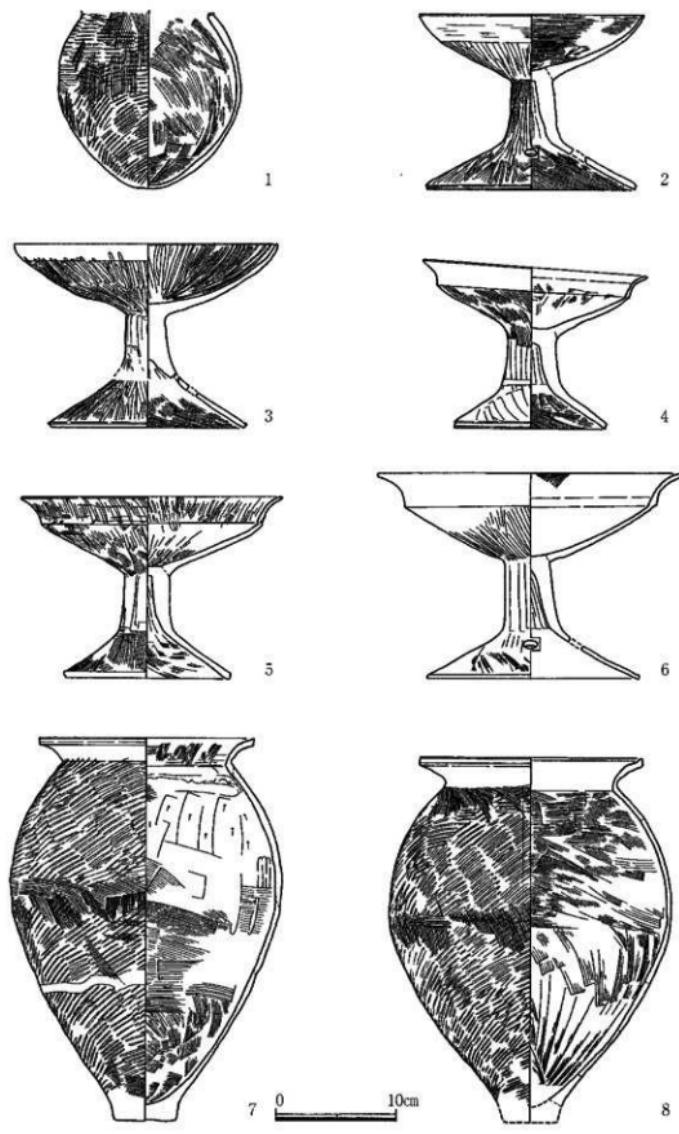
1. 盛土
2. 黒褐色粘砂（床土）
3. 灰色粘砂
4. 灰黄色微砂シルト（落ち込み状遺構1埋土）
5. 暗灰色微砂
6. 淡灰黄色砂礫混微砂シルト（落ち込み状遺構2埋土）
7. 淡黄褐色微砂シルト
8. 黄褐色砂混粘質シルト（土器集積埋土）
9. 灰色～黄灰色微砂
10. 暗黄灰色微砂シルト
11. 淡青灰色シルト（水分多く含む）
12. 淡黒褐色シルト（水分多く含む）
13. 灰色粗砂

第2調査区



1. 盛土
2. 淡黒褐色粘砂（旧耕土）
3. 灰色細砂
4. 黄灰色砂礫混シルト（近世包含層）
5. 灰黄色シルト
6. 黄灰色微砂シルト
7. 黄褐色砂混粘土（弥生時代後期もしくは古墳時代包含層）
8. 暗灰黄色微砂
9. 暗黄褐色微砂
10. 暗黄灰色微砂
11. 黄灰色微砂
12. 暗灰色微砂シルト
13. 暗灰黄色粗砂
14. 灰黄色細砂
15. 暗灰色シルト
16. 灰色シルト
17. 淡灰色微砂
18. 明黄色粗砂

第32図 土壌断面図 (1/40)



第33図 出土遺物実測図 (1/4)

6. 中田遺跡（98-186）の調査

1. 調査地：八尾市八尾木北6丁目102・103・104・105

2. 調査期間：平成10年7月23日・平成11年1月7日

3. 調査方法

共同住宅の建設に先立ち、建物建設部分の東西2か所に3×3mの調査区を設定し、第1調査区は地表下2.7mまで、第2調査区は地表下2.0mまで、重機と人力を併用して調査を行った。

4. 調査概要

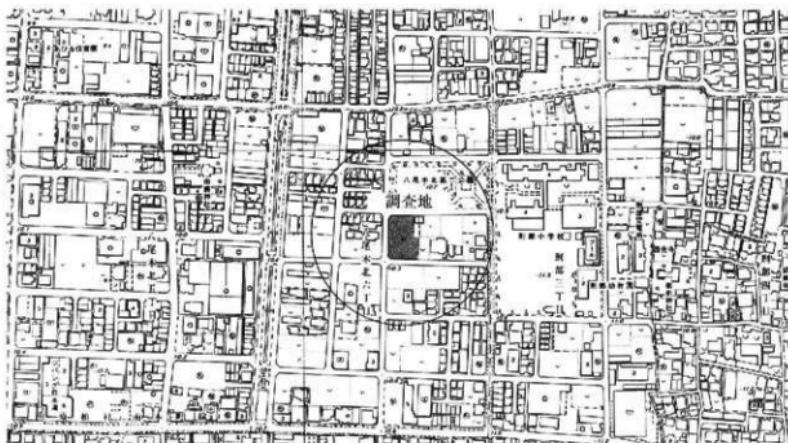
第1調査区：旧耕土直下に瓦・土師器・陶器を含む暗灰褐色小礫混砂質シルト層があり、その下の地表下0.45～0.7mの暗黄褐色砂質シルト層では瓦・土師器・須恵器・陶器が出土し、中世の包含層と考えられる。この包含層の直下で杭列（3本並ぶ）と落ち込み状遺構が検出でき、この落ち込み状遺構の埋土である灰黄色微砂混シルト質粘土層内からは土師器・須恵器・弥生土器が出土している。またこの遺構面のベースとなる暗黄灰色微砂シルト層には土師器・須恵器・瓦器が含まれ、その下の灰黄色シルト混微砂層からは土師器・須恵器が出土することから中世の遺構面と考えられる。杭列についてはその性格は不明であるが、造存していた杭は比較的新しく、また上部が削られている痕跡があり、同レベルで検出した落ち込み状遺構よりは新しい時期のものと思われる。

調査区北東部では、地表下0.8～1.3mで中世の遺構面のベース層を切り込む粗砂層がみられ、この遺構面以前の旧流路と考えられる。以下地表下2.35mまでは粘土層が続き、その下の地表下2.35m以下は粗砂層となるが遺構・遺物は確認できなかった。

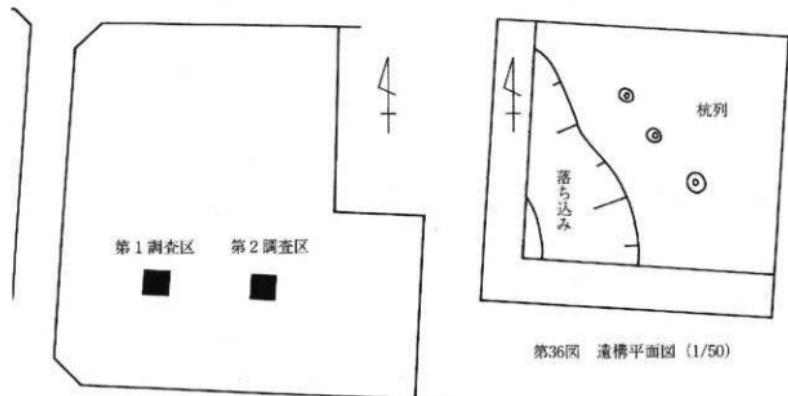
第2調査区：第1調査区でみられた中世の包含層および遺構面は検出できず、地表下0.7～1.2mの粗砂層には土師器・須恵器（杯蓋の宝珠つまみなど）が含まれ、平安時代以降の流路と考えられる。この流路は第1調査区で検出した流路と続くようである。以下の層では遺構・遺物とともに確認できなかつた。

両調査区とも出土遺物は小片で図化できなかった。また基礎工事の際に調査部分以外の立会調査を行ったが、遺構は確認できなかった。

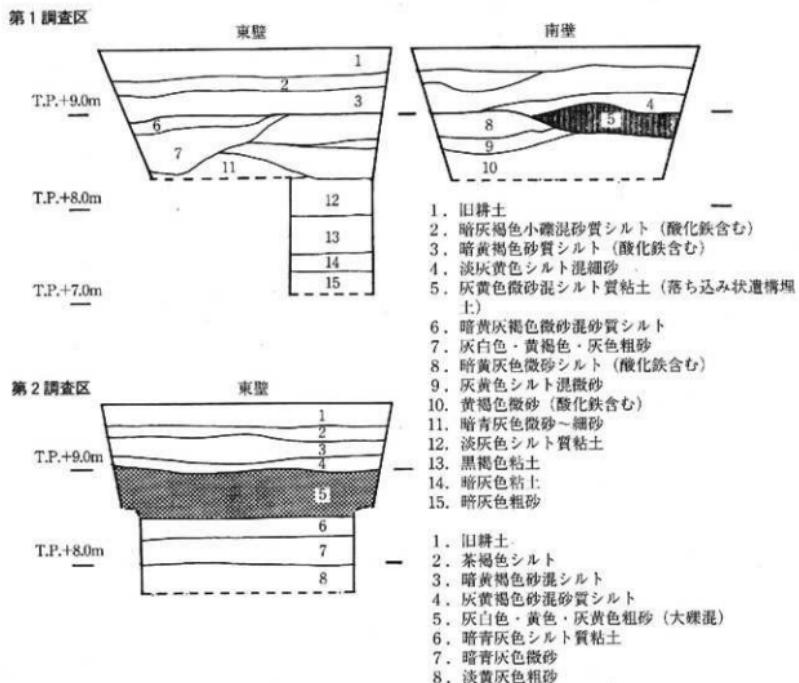
（吉田珠己）



第34図 調査地周辺図 (1/5000)



第35図 調査区設定図 (1/600)



第37図 土層断面図 (1/50)

7. 中田遺跡（98-512）の調査

1. 調査地：八尾市刑部4丁目214番地・215番地

2. 調査期間：平成11年1月22日

3. 調査方法

共同住宅の建設に先立ち、既存建物があるため建設建物の西側部分に1.0×2.5mの調査区を設定し、地表下1.5m前後まで重機と人力を併用して調査を行った。

4. 調査概要

地表下0.5mの旧耕土直下で淡黄灰褐色微砂シルト層がみられ、土師器・須恵器片が含まれることから中世の包含層と考えられる。またその下の明茶灰色礫混微砂層からも土師器・須恵器が出土するが、調査範囲が狭いため明確な遺構は確認できなかった。この層は層厚15cmあり、遺物からみて奈良時代の包含層と考えられる。地表下0.65m以下は粗砂層となり、地表下1.5m前後まで続くのが確認できた。弥生土器（V様式）が含まれることから、弥生時代後期以降の旧河川の流路跡と思われる。

5. 出土遺物

図化できた土器は2点ある。1は明茶灰色礫混微砂層から出土した土師器の皿で、2は明灰黄色粗砂層から出土した弥生土器の甕の口縁部である。

6.まとめ

今回の調査では範囲が狭く、明確な遺構および遺構面は検出できなかつたが、周辺の調査で奈良時代から平安時代にかけての遺構および遺構面が確認されている。この調査区の北側で(財)八尾市文化財調査研究会が行った第17次調査では、奈良時代に比定される柱穴に一辺20cmの方形の柱根が遺存しているのがみつかっており、一般の建物より大型の建物に使用されていたものと考えられている。またその東側の調査（第24次調査）では、掘建柱建物を中心とする平安時代の居住域が検出されており、この付近一带に奈良時代から平安時代にかけての集落が広がっていたようである。
(吉田珠己)

参考文献 (財)八尾市文化財調査研究会『(財)八尾市文化財調査研究会報告43』1994年

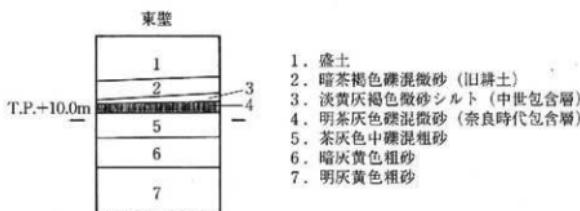
『中田遺跡』八尾市文化財調査研究会報告49 1995年



第38図 調査地周辺図 (1/5000)



第39図 調査区設定図 (1/600)



第40図 土層模式図 (1/40)



第41図 出土遺物実測図 (1/4)

8. 西郡廃寺遺跡（99-146）の調査

1. 調査地：幸町6丁目33-1.-2.36-1.31-5.21-3.31-10.-42. 33-2.24-4.-1

2. 調査期間：平成11年7月30日

3. 調査方法

事業計画地に3m×3mの調査区を設定し、地表下3.25mまで掘削を行い、土層観察を行った。現地表はT.P+5.05m前後である。

4. 調査概要

遺物包含層は作土直下の暗灰色粘土と、その下部の灰色シルト粘土で、奈良から平安時代にかけての土器が出土する。遺構面は地表下2.05m (T.P+3m) の暗緑灰色シルト（マンガンを含む）をベースとし、奈良時代の土坑1とこれに上部を切られていた土坑2が検出された。

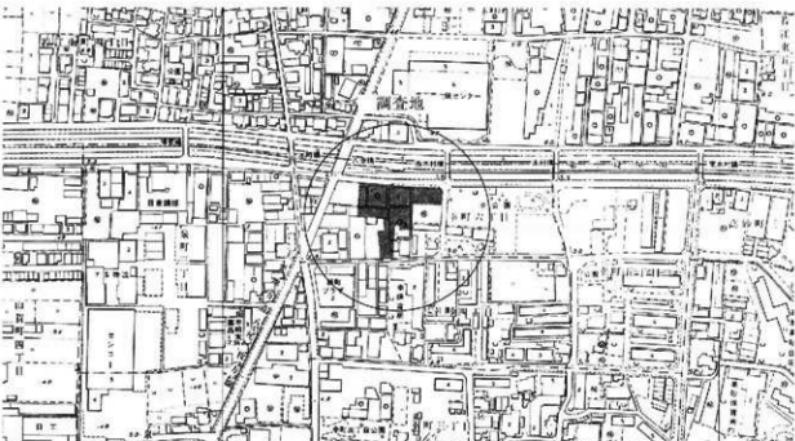
土坑1の検出時の調査区の大きさは南北1.6m、東西2mで、遺構は調査区全体に広がっていた。（このため、遺構のベース層の確認は断面で行なった。）埋土は灰黒色粘質シルトと炭化物を含む灰黒色粘土の2層に分けられ、深さ0.5m前後を測る。遺物は下部層に多くみられ、土師器杯、壺、鉢、須恵器壺等の他に2次焼成を受けた土師器皿、斎串が出上している。

土坑2は断面での確認であったが、土坑1に切られていたようで、検出幅約0.8m、深さ0.23mを測る。しかし、遺物が出土しておらず、時期は明確ではない。

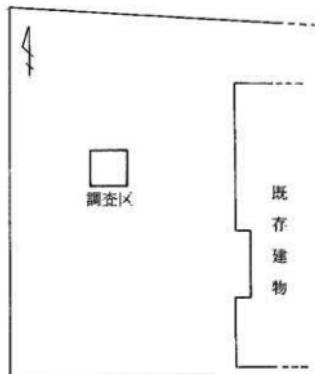
5. 出土遺物

1~14は土坑1より、15~17は⑤層より出土している。土坑出土遺物は土師器皿C、皿A、杯A、杯B、壺C、鉢、須恵器壺がある。土師器皿及び杯は内部に暗文がみられるものと、みられないものがあるが、施されている暗文は1条である。外面の調整は表面の剥離によって、不明なものが多いが、遺存しているものは、ミガキが雑なものである。こうしたことから土坑1は8世紀中葉の時期をあてることができる。⑤層出土遺物は土師器碗、須恵器杯Bがあるが、土坑1よりもやや新しい時期のものとみられ本調査地の時期幅を示している。調査地近辺には奈良時代に建立された西郡廃寺があり、これと関係する氏族の居住域である可能性が高い。

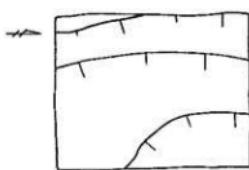
（消）



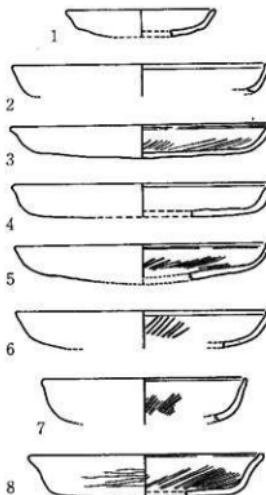
第42図 調査地周辺図 (1/5000)



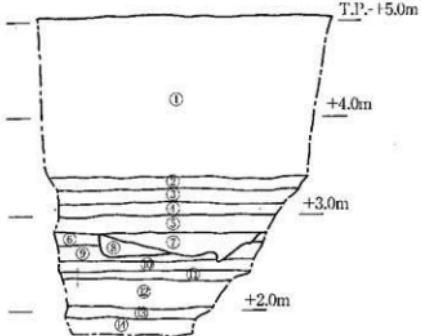
第43図 調査位置図 (1/200)



第44図 土坑平面図 (1/40)

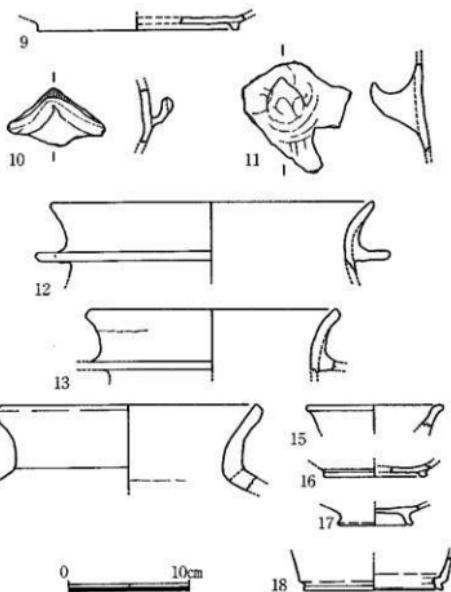


第46図 出土遺物実測図 (1/4)



- | | |
|-------------------------------|------------------------|
| ①盛土 | ⑥暗灰色+緑灰色粘質シルト
(土坑2) |
| ②旧耕土 | ⑦暗淡緑灰色シルト |
| ③暗灰色粘土 (細粒砂) | ⑩淡灰色シルト (Fe) |
| ④灰色シルト粘土 (細粒砂) | ⑪明灰色シルト (Fe) |
| ⑤灰黒色粘質シルト (細粒砂)
(土坑2上層) | ⑫灰色粘土シルト (Fe少) |
| ⑥暗綠灰色シルト (MN) | ⑬暗灰色粘土シルト |
| ⑦灰黑色粘土 (シルト、炭化物)
(土坑2堆土下層) | ⑭暗綠灰色シルト |

第45図 東壁土壙断面図 (1/50)



0 10cm

9. 東弓削遺跡（98-572）の調査

1. 調査地：東弓削町3丁目81

2. 調査期間：平成11年6月14日

3. 調査方法

専用住宅の合併処理浄化槽設置のため、東西約3.5m、南北約2mの調査区を設定し、土層観察を行った。なお、掘削深度は浄化槽に合わせ、地表下約1.9mである。現地表は約T.P+12.4mを測る。

4. 調査概要

旧作土は地表下約0.9m (T.P+12.5m) である。今回、確認したのは平瓦と丸瓦を多量に包蔵する浅い落ち込みを呈するものであり、検出高は約T.P+10.75mである。落ち込みは調査区中央から西に広がっており、東西2.1m以上、南北2m以上、深さ0.3m前後を測る。埋土は暗灰色シルト粘土（細粒砂混）で、瓦のほかに瓦器および土師器片が出土している。しかし、ベース層である暗黄灰色シルトにも瓦片が見られることから、瓦を使用した建物の倒壊から時間のあるいは空間的な距離が存在しているものと推定され、瓦は中世以降に集められたものが一括してここに遺棄された可能性がある。ただし完形の平瓦があることから空間的には大きな隔たりがあったとは考えられない。

本調査においては前述のように掘削深土に制約があったため、瓦が本来使用されていた時期の土層を検出することはできなかった。落ち込み構築面や落ち込みそのものは湧水のシルト層であり、瓦葺の建物を建てるのは難しく思われる。

5. 出土遺物

先述しているようにここでは平瓦・丸瓦の他に瓦器と土師器片が出土しているが、いずれも細片で図化することはできなかった。そのためここでは瓦のみを掲載した。(1)から(7)までの平瓦は凸面縫目タタキ、凹面布目痕であるが、(6)は離れ砂により不明瞭であった。

(1) はほぼ完形の平瓦で、下端部に自重による歪みとひび割れがある。凸面・凹面ともに糸切り痕が明瞭である。縫目タタキの原体は長さ約14cm、幅4cm以上である。側縁にケズリ残した布目痕があり、1枚作りとみられる。



第47図 調査地周辺図 (1/5000)

- (2) 凹面に糸切り痕が明瞭である。縄目タタキ原体は長さ14cm、幅3cm以上である。1枚作り。
- (3) 向面に糸切り痕が残る。縄目タタキ原体は長さ約15cm、幅約4.2cmである。側端面ヘラケズリ。
- (4) 凹面に糸切り痕が残る。側端面ヘラケズリ、1枚作り。
- (5) 凸面の縄目はやや太く、凹面の布目は細い。胎土中に赤い砂粒(クサリ礫)が顕著である。1枚作り。
- (6) 凸面にとくに砂粒が多く、調整は不明。凹面は糸切り痕がみられる。破損部による胎土に砂粒はみられないが、凸・凹面ともに砂粒があることから離れ砂と推定される。
- (7) 領忠質の瓦で、0.5~1cmの櫻がみられる。凹面には糸切り痕がみられる。
- (8) は全体に薄く、湾曲率も低いことから道具瓦と推定される。凸面側部にナデによる浅いエグリがはいる。
- (9) は唯一凸面が縄目タタキではなく、斜格子タタキをもつて、凹面の調整は不明である。
- (10) は十線式丸瓦である。丸瓦は少なく、全体の形状がわかるものはなかった。

軒瓦がなく、瓦の時期が明確にはしえないが、これらから奈良~平安時代に比定してもよいと思われる。次にこれら以外に気づいた点を2、3挙げておく。①2次焼成を受けた瓦が稀に存在する。②齊足があるものがある。③縄日の太さに2~3本/cmと4本/cmの2種があり、厚さもそれぞれ約2.5cmと約2cmである。また、國化できる瓦器椀はなかったが、観察できる特徴から13世紀代に比定できる。

6.まとめ

落ち込みに堆積した上層は瓦の時期とは異なっており、またベース層が湧水のシルトを主体とするところから、瓦が本来使用された場所が若干離れている可能性がある。しかし、完形の瓦もあることから大きく離れていることはないと思われる。

ではこの瓦はどこで使用されていたかを考えてみたい。調査地北東約300mには弓削寺跡(由義寺)と推定されている場所がある。しかし、これまで遺構が検出されていないため幻の寺である。これに当たることは可能だが、空間的な距離が大きい。そこで付近の字名を参考にしてあらためて弓削寺の位置を整理してみよう。なお、字名については文献(1)を参考にした。

52図をみると今回の調査地は「西口」と呼ばれる地域である。西口の東側には「古屋敷」が大きく広がっており、これを取り囲むように「大門」、「古宮」、「北口」、「恩堂(お堂?)」、「南堀内」や「社堂」がある。そして、弓削寺跡とされている場所の字名は「道浦」、「南美ノ浦」(これらは「宮裏」・「南宮裏」の意か)、「道ノ部」、「野本」、「与五郎」、「大地」、「花畠」などである。こうして字名を単純に比較すると、寺に関係する字は現在の推定地より南に多くあることがわかる。さらに、現状の推定地から遺構が検出されていないことからみて、弓削寺が今回の調査地に近い位置にあるものと考えられよう。

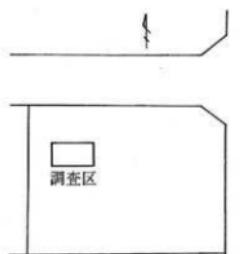
では、瓦が何故湧水のシルト層にあったのか。これも推定に過ぎないが、大和川が影響しているものと考える。調査地南200mの地点でかつて旧大和川が長瀬川と大中川に分岐していた。大和川は古来より度々氾濫を起こしており、日本書記にもその記録がある。河川が分岐するところは流れも早く、多くの土砂が運ばれた。このように考えると氾濫により本来の建物が調査地周辺に流されたものと推定することができる。

今回、弓削寺周辺で初めてまとめて瓦が出土したため、寺の位置をあらためて考えてみた。これまでも「北口」付近で凝灰岩の破片が採取されていたり、字「保市」で奈良時代の軒平瓦が見つかっているが、これはこの推定と矛盾しない。しかし、あくまでも推定であり、今後氾濫による土砂の堆積の下に遺存している遺構が見つかり、これを裏付けされることが望まれる。

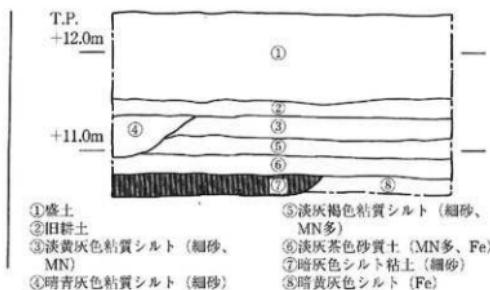
(道)

参考文献

- (1) 柏原武雄・奥田尚「河内西之京周辺史」昭和56年7月
- (2) 八尾市教育委員会「東弓削遺跡」1976.4
- (3) 山本博「竜田越」学生社1971



第48図 調査位置図 (1/400)



第49図 北壁土層断面図 (1/50)



1



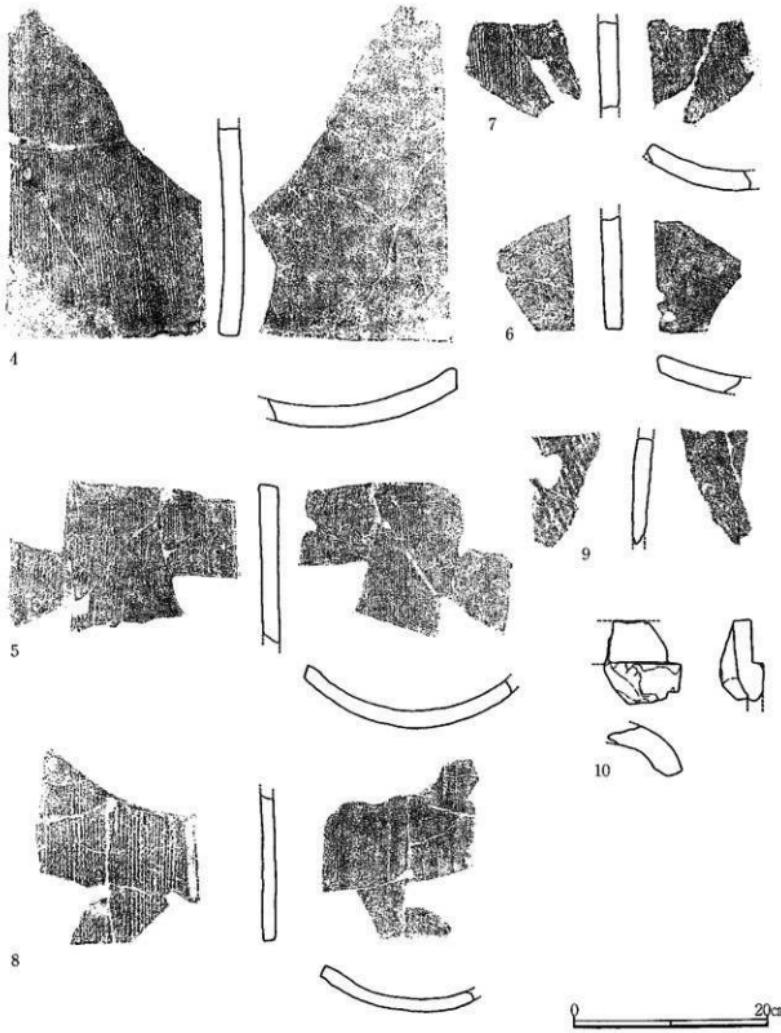
2



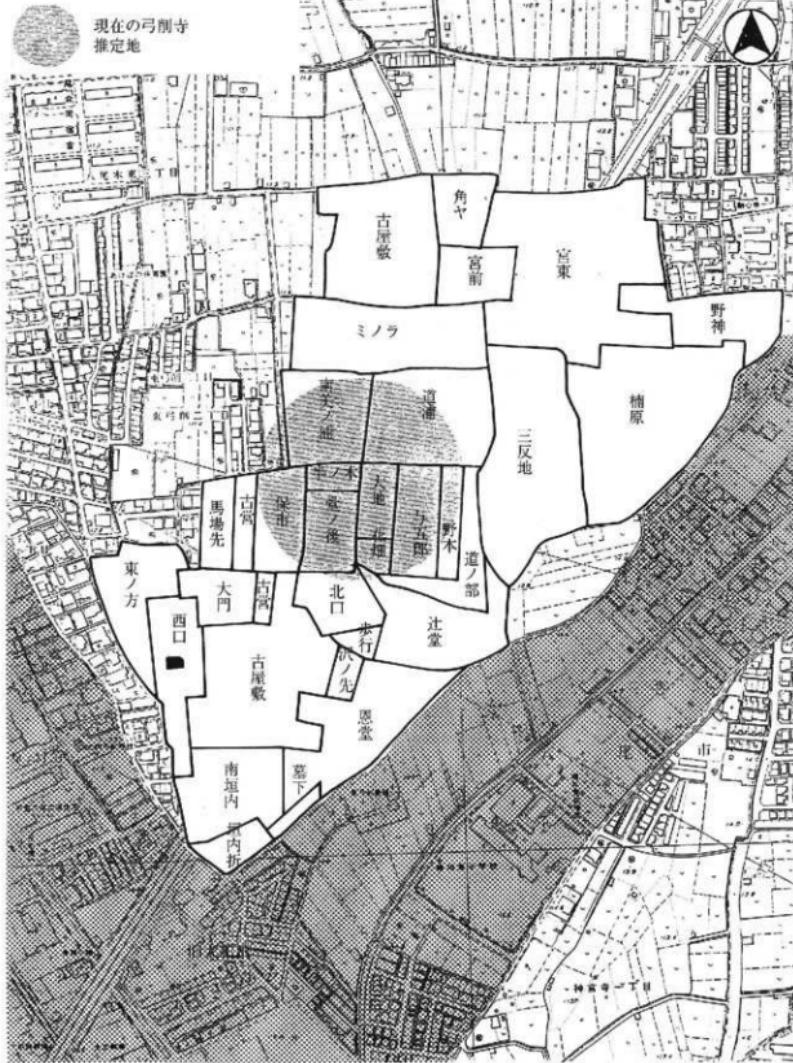
3



第50図 出土遺物実測図 (1/5)



第51図 山土遺物実測図 (1/5)



第52図 調査地周辺字名図

10. 水越遺跡（99-342）の調査

1. 調査地：八尾市服部川3丁目74-2

2. 調査期間：平成11年10月6日

3. 調査方法

施工予定地の北側と南側に2.5m四方の調査区を設定し、地表下2.0m前後まで確認した。さらに北側と南側の調査区間の中央付近に1.5m四方の調査区を設定し、地表下1.5m前後まで確認した。なお中央調査区については、既存樹木が存在したために西側寄りの設定となった。

4. 調査概要

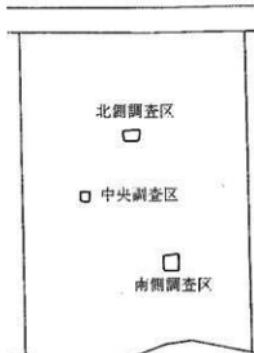
南側調査区では地表下0.77～0.84mにおいて淡茶灰色粘性砂質土層（7層）を確認した。この土層には弥生時代後期とみられる磨滅した土器片がやや密に含まれていた他、須恵器坏片（2）、13世紀前後かとみられる瓦器梶片（1）が含まれていた。さらに地表下0.84～0.92mで、やや磨滅した弥生土器片を密に含む暗茶灰色粘性砂層（8-1層）を確認した。この土層の上面では南北方向の溝を検出した。埋土には4の壺片を始めとする弥生土器片の他に、13世紀頃とみられる土師器小皿片（3）が1点含まれており、同期の遺構とみられる。この溝は検出長1.6m、最大幅0.44m、深さ0.14mを測り、埋土は灰色粘性砂層である。さらにその下の地表下0.92m～1.06mで同じく磨滅した弥生土器片をやや含む暗灰色粘性砂層（11層）を確認した。10・11層に含まれていた弥生土器片は弥生時代後期に位置付けられるものである。さて弥生時代の遺構面であるが、暗灰色粘性砂層の下に堆積する灰色粘性砂層（15-1層）では遺物が確認されず、この上面では杭状のピットとみられる土色の変化が見られたことから、この面が遺構面となる可能性がある。さらにこの下を地表下2.0m前後まで掘削し、暗灰色茶粘砂層（18層）、灰白茶色粘質土層（19層）を確認したが、遺構・遺物は確認できなかった。

北側調査区では、地表下0.44m～1.0m前後で南側調査区において確認した弥生土器包含層に類似する暗灰茶色粘砂層（8-2層）を確認したが、遺物は確認できなかった。さらにこの下では地表下0.9m～1.36mの灰青色粘土層（12層）、灰白色砂層（6・13層）をはさんで、暗灰色粘土層（14-1・14-2層）を確認したが、遺構・遺物は確認できなかった。

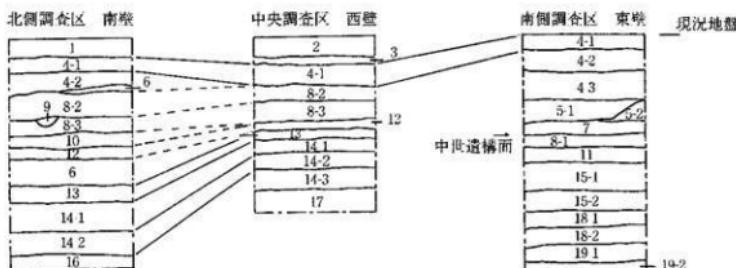


第53図 調査地周辺図 (1/5000)

4

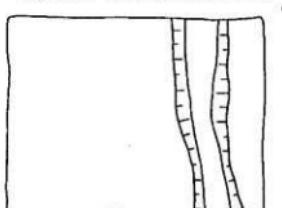


第54図 調査区設定図 (1/800)

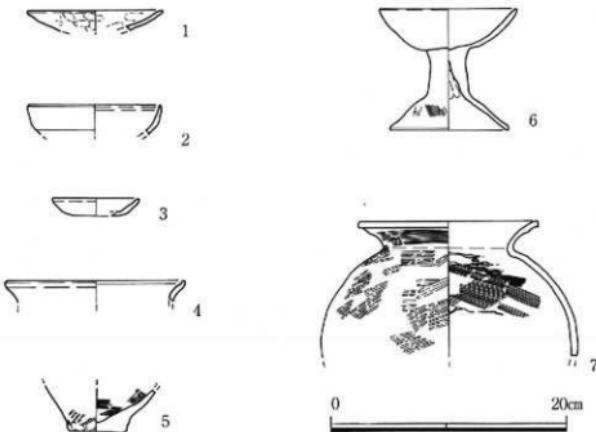


1. 黄灰色砂層
2. 灰色砂礫層
3. 茶灰色砂質土層
- 4 - 1. 灰茶色粘性砂質土層
- 4 - 2. 同上 (小砾混)
- 4 - 3. 同上 (小砾混、砂粗)
- 5 - 1. 灰茶色粘性砂質土層
- 5 - 2. 同上 (砂細) (土師器片含む)
6. 灰白色微砂層
7. 淡茶灰色粘性砂質土層 (土器片、須恵器片、弥生土器片含む)
- 8 - 1. 暗茶灰色粘性砂層 (弥生土器片密に含む、上面が中央遺構面)
- 8 - 2. 同上 (灰白色砂混)
- 8 - 3. 同上 (粘性大、灰白色砂ブロック)
9. 灰白色砂層
10. 暗灰茶色粘質土
11. 暗灰色粘性砂層 (弥生土器片やや含む)
12. 灰青色粘土層
13. 灰白色粗砂層
- 14 - 1. 暗灰色粘土層 (弥生土器片密に含む)
- 14 - 2. 同上 (砂含む) (弥生土器片やや含む)
- 14 - 3. 同上 (色調淡)
- 15 - 1. 灰色粘性砂層
- 15 - 2. 同上 (色調暗)
16. 灰色シルト層
17. 黒灰茶色粘砂層
- 18 - 1. 暗灰茶色粘砂層
- 18 - 2. 同上 (砂多)
- 19 - 1. 灰白茶色粘質土層
- 19 - 2. 同上 (粘性大)

南側調査区 8-1層上面検出遺構平面



第55図 調査区平面 土層断面図 (1/40)



第56図 出土遺物実測図(1/4)

99-342(MK)出土遺物観察表

出土地	種類	番号	器種	部位	径(cm)	現高(cm)	調整・手法	色調	焼成	胎土	備考
南調査区第2層	瓦器	1	楕	口縁～体部	11.2	1.6	外面—ユビオサエのち横方向ナデ 内面—ユビオサエ	灰色	軟	やや良	
	須恵器	2	环	口縁～体部	11.2	2.5	内外面—ロコナデ 体下方外面—不定方向ナデ	灰色	やや軟	やや粗	
溝1	土師器	3	皿	口縁～底部一部	7.2	1.5	内外面—部ユビオサエ	暗青褐色	軟	やや良	
	弥生土器	4	甌	口縁部	11.6	1.8	内外面—横方向ナデ	暗褐色	非常に軟	やや粗	
中央調査区第6層	糞生土器	5	甌	底部	4.4	3.7	体部外面—タキキ(3本/cm) 底部外面—ユビオサエ 内面—ハケメ(5本/cm)	暗黃褐色	軟	粗	
		6	高环	口縁～底部	11.6	10.2	體部外面—タチバケ(8本/cm) 底部内面—ユビナデ	暗褐色	非常に軟	全体に漆滅	
		7	甌	口縁～底部(口径)	11.4 15.0		口縁内面—ヨコハケ(13本/cm) 体部外面—タキキ(4本/cm) 体部内面—ナナメ方向ハケメ(13本/cm)	暗褐色	軟	粗	口縁外面—スス付着

中央調査区では地表下0.4~0.8mで南側調査区において確認した弥生時代包含層と類似する暗茶灰色粘性砂層(8-2・8-3層)を確認したが、遺物は確認できなかった。が、この下では北側調査区で確認した12層・13層をはさんで、地表下0.85~0.98mにおいて、5~7を始めとする弥生土器後期の土器片を密に含む暗灰色粘土層(14-1層)を確認した。これらは6の高環、7の甌の器形から畿内V様式期末に位置付けられるものとみられる。さらにその下の地表下0.98~1.1mの暗灰色砂混粘土層(14-2層)にも弥生土器片がやや含まれていた。この14-1・14-2層は北側調査区では、地表下1.36m~1.8mで確認しているが、出土遺物は確認できていない。14-1層の遺物はまとまった状態で出土しており、低湿地の落ち込みの中もしくは、溝等の造構に転落した土器である可能性がある。さらに北側調査区との層序関係からみて、この低湿地の落ち込みもしくは溝等の造構は、施工予定地の中央から北側に向かって落ち込むものであった可能性がある。この下は地表下1.44m前後まで掘削し、14-3層、黒灰色粘土層(17層)を確認したが、遺物は確認できなかった。しかしながら、この土層の掘削は一部を人力で行ったものであり、14-1・14-2層と一連の埋土である可能性を残す。

(吉田野乃)

11. 八尾南遺跡（99-332）の調査

1. 調査地：八尾市若林町2丁目143、142、130

2. 調査期間：平成11年10月20日

3. 調査方法

施工予定地の東側と西側に2.5m四方の調査区を設定し、地表下2.6～2.7m前後まで確認した。

4. 調査概要

東側調査区では地表下1.04m～1.14m、TP+11.4～11.6mで一部耕作土に削平された状態で、淡緑灰色粘砂層を確認した。この上面では南北方向の鶴溝がみられた。淡緑灰色粘砂層からは7世紀以降の須恵器の片环（1）、埴輪の蓋の立飾り片（4）等が含まれており、混入とみられる。さらに地表下1.16m前後、TP+11.48m以下で灰色砂層（9層）を、さらに地表下1.22m～地表下1.5m、TP+11.4m～11.1mで、この9層を切り込む茶灰青色粘性砂質土層（6層）、暗茶灰褐色有機物混粘質上層（7層）、灰白色ブロック混茶灰黄色粘砂層（8層）を確認した。最上層の6層からは9層の肩部に上方から転落して載った状態で円筒埴輪片がまとまって出土している。出土円筒埴輪（3）は窯窓焼成によるもので、外面の2次調整はタテハケのみで、タガの断面は扁平で低い。上から2段目に円形のスカシをいれる。川西編年のV期に位置付けられる。中層の7層からは5世紀中葉～後葉にかけての所産とみられる土師器壺片（2）等がややまとまった状態で出土している。以上の出土状態からここでは墳丘上部を削平された状態の埋没古墳を確認したものと考えられる。時期は周濠内に転落した円筒埴輪、土師器の様相から概ね5世紀後半のものと考えられる。墳丘構成層である9層の上面及び西壁断面を精査したところ、周濠の肩のラインは南北方向に延びて北壁近くで西に向かって曲がっていくようであり、方墳の北東側のコーナーと、東辺の一部を確認した可能性がある。さらに下層では地表下1.74～1.84m前後の茶灰青色粘砂層（15層）で弥生土器片とみられる土器小片を1点確認した。西側調査区では地表下1.14m以下、TP+11.3m以下で淡灰緑色粘性砂層（11層）、灰茶色粘性砂層（12-1・12-2・12-3層）を確認した。これらの土層は東側調査区で検出した方墳の墳丘構成層と層序的には対応するものとみられるが、ここでは古墳の痕跡は確認できなかった。

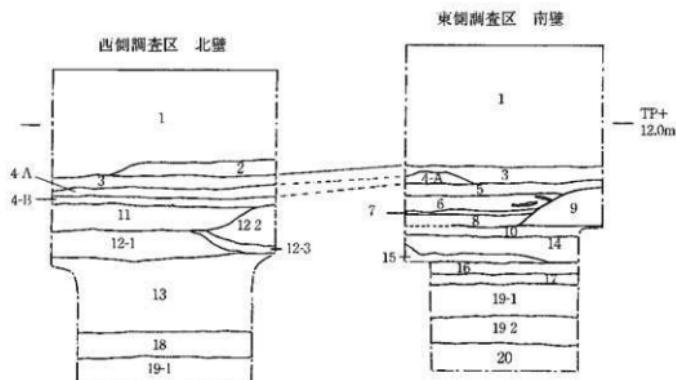
（吉田乃）



第57図 調査地周辺図（1/5000）



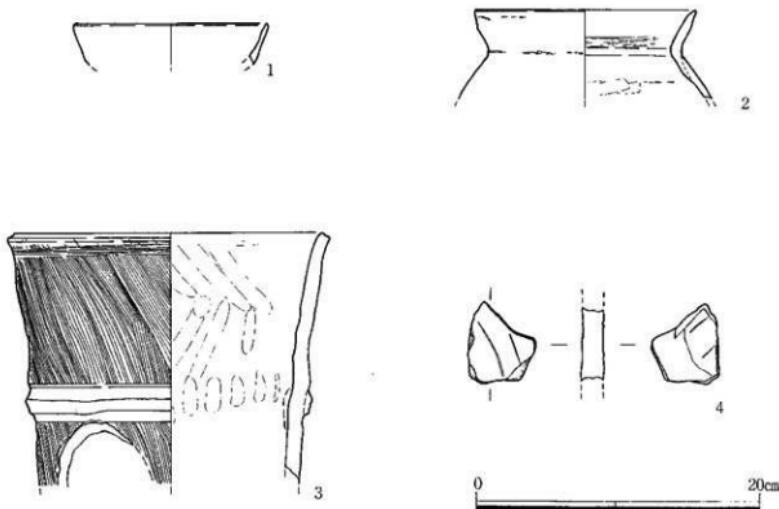
第58図 調査区設定図 (1/1200)



1. 現代盛上層
2. 黒色斑状灰色粘砂層
3. 耕作土層
- 4-A. 淡灰緑色粘砂層
(西側調査区、上面で
蜀溝検出)
- 4-B. 同上 (色調灰褐色
味滑びる)
5. 茶灰緑色粘質土
6. 茶灰青色粘性砂質土
(埴輪片含む、周塗埋
土)
7. 暗茶灰褐色有機物混
粘質土 (土師器片含
む、周塗埋土)
8. 茶灰黄色粘砂層 (周
塗埋土)
9. 灰色砂層 (埴丘構成層)
10. 茶灰紫色粘砂層
11. 淡灰緑色粘性砂層
- 12-1. 灰茶色粘性砂層
- 12-2. 同上 (砂少)
- 12-3. 同上 (砂細)
13. 黄灰色砂層
14. 灰色砂層 (灰黃茶色
粘砂ブロック)
15. 茶灰色粘砂層
16. 黄褐色粗砂層
17. 黄灰褐色粘砂層
18. 灰綠色粗砂シルト層
- 19-1. 暗灰色粘土層
- 19-2. 同上 (砂多)
20. 淡灰緑色微砂シルト
層

東側調査区 平面

第59図 調査区 平面・七層断面図 (1/40)



第60図 出土遺物実測図 (1/4)

99-332 (YS) 出土遺物観察表

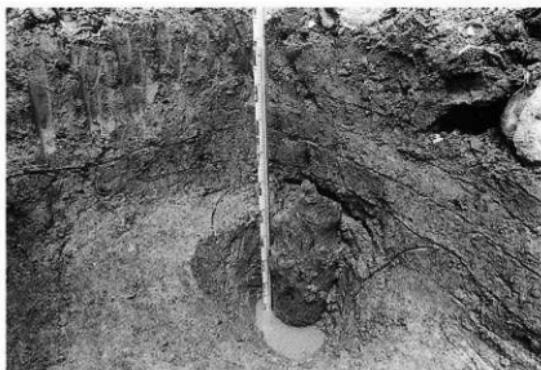
出土地	種類	番号	器種	部位	径(cm)	現高(cm)	調整・手法	色調	焼成	胎土	備考
東側調査区4-A層 東側調査区7層	須恵器	1	环	口縁~一体部	13.8	2.6	内外面一ロクロナデ	暗灰青色	硬	粗	
	土師器	2	壺	口縁~肩部	16.0	6.3	外面一ユビオサエのち横 方向ナデ 内面一肩部ユビナデ、口 縁部ヨコハケ	灰白色	軟	非常に 粗	
東側調査区6層	埴輪	3	円筒埴輪	口縁上端~ 上から2段目	22.0	17.9	外面一タテハケ、口縁部 直下ヨコハケ、タガ部分 ヨコハケのち横方向ナデ 内面一斜め方向ユビナ デ、タガ部内面一ユビオ サエ、口端部外表面一横 方向ナデ	褐色	やや硬	粗	上から2段目に 円形スカシ、タ ガ部内面に粘 土塊付着
東側調査区4-A層	埴輪	4	蓋形埴輪	立脚部小片	最大残存 長5.8	最大厚 1.65	摩滅により不明	淡褐色	軟	粗	

図版

図版1 郡川遺跡（99—104）の調査



第1面土坑検出状況



第2面柱根検出状況



柱根

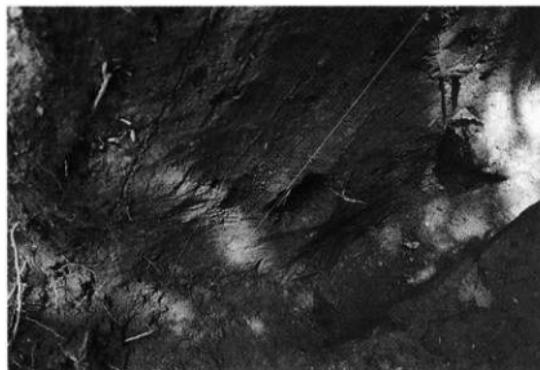
図版2 高安古墳群（99—252）の調査



調査地（南東より）



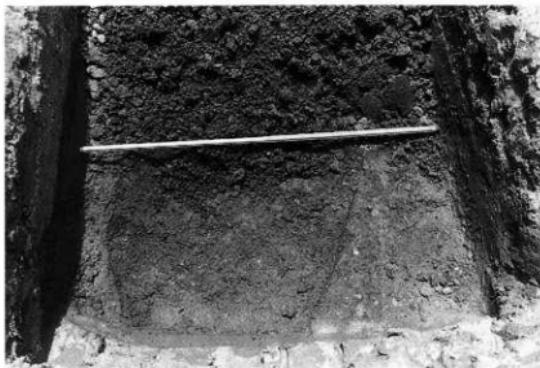
第5調査区（南東より）



(天)

第5調査区 東壁土層断面

図版3 西部廃寺遺跡（99—146）・東弓削遺跡（99—576）の調査



西部廃寺遺跡土坑検出状況

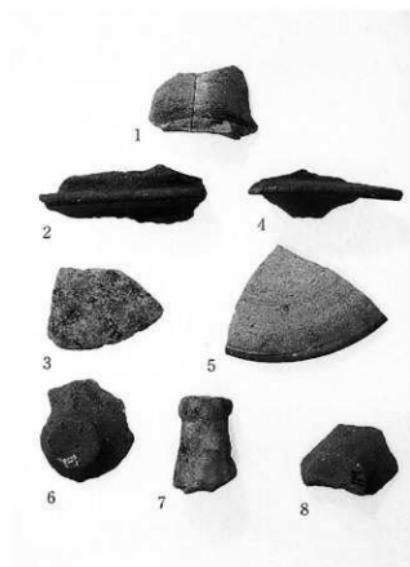


土器出土状況



東弓削遺跡瓦出土状況

圖版4 郡川遺跡（99—104）·高安古墳群（99—252）出土遺物



出土土器

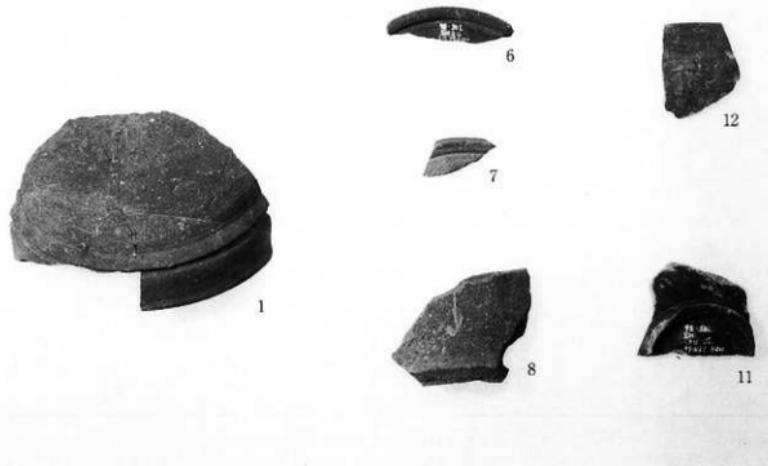
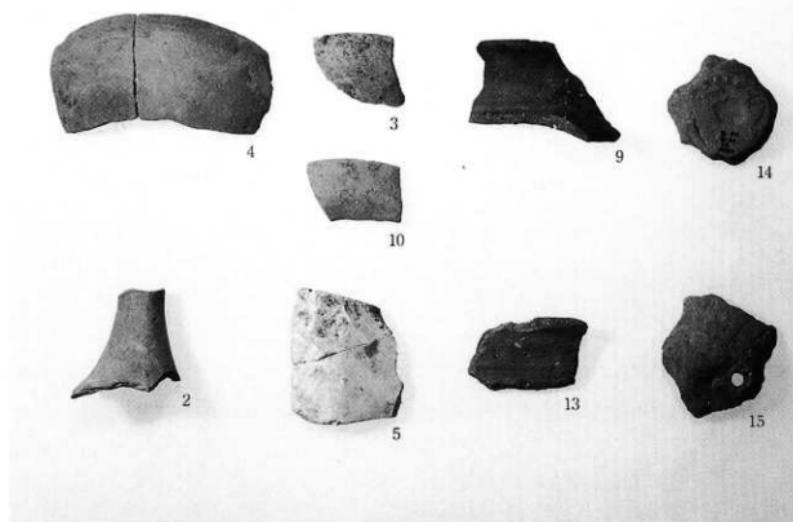


柱根



99-252 繩文土器（3）

圖版 5 成法寺遺跡（99—502）出土遺物



圖版 6 東鄉廢寺（99—205）出土遺物



1



2



3



4



5



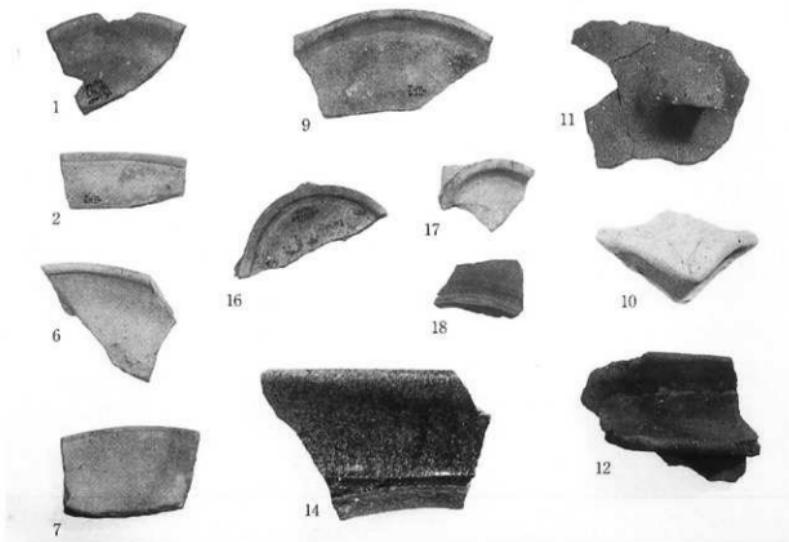
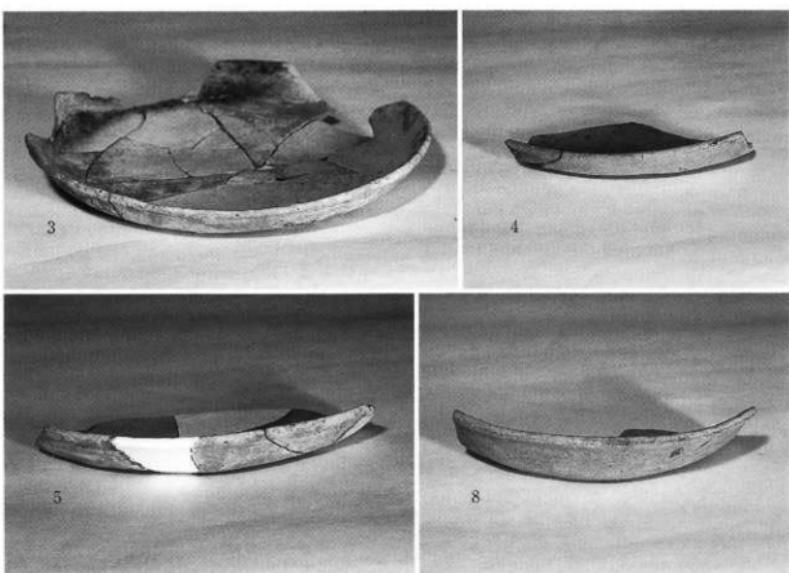
6



7

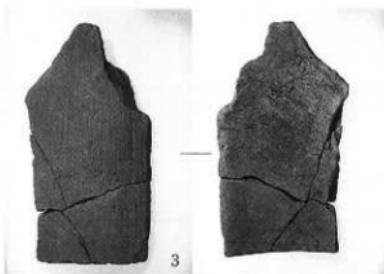
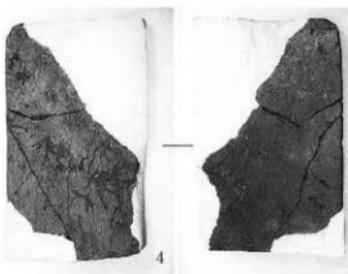


8



出土遺物

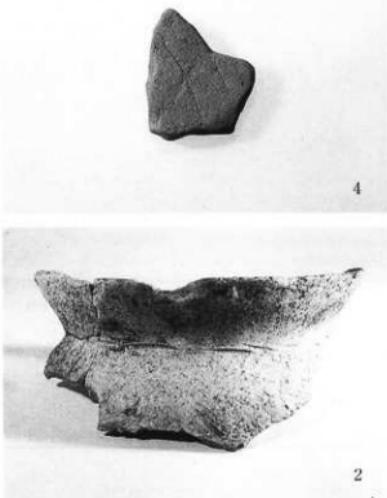
圖版 8 東司削遺跡 (98—572) 出土遺物



出土瓦



99-342



99-332

報告書抄録

ふりがな 書名 副書名 巻次 シリーズ名 シリーズ番号 著者名 編集者名 所在地 発行年月日	やおしないいいせきへいせい!! ねんどはくつちょうさほうこくしょ。 八尾市内道路平成11年度発掘調査報告書。 平成11年度国庫補助事業 42 木田敏幸・酒井・吉田野乃・吉田珠巳・藤井淳弘 八尾市教育委員会 〒581-0003 大阪府八尾市本町1丁目1番1号 Tel 0729-91-3881 西暦2000年3月31日					
ふりがな 所収遺跡名 所在地	ふりがな 所在地 内町村 通称番号	コード --	北緯 --	東経 --	調査面積 m ²	調査課題
こまかにいせき 郡川遺跡	やね。 こまかのがわ 八尾市 郡川	27212	34°37'09"	135°38'37"	990705-012	事例住宅施設に伴う設施 確認調査
こまかにいせき 小阪合遺跡	やね。 あかいでせき 八尾市 青山町	27212	34°37'03"	135°36'03"	991111	宝塚古墳に伴う遺構確認 調査
こまかにいせき 成法寺遺跡	やね。 かめいたふうじ 八尾市 高美町	27212	34°37'16"	135°36'43"	990125-27-29	近隣付近住居建築に伴う遺構 確認調査
ながやまこふくん 高安古墳群	やね。 おんち 八尾市 黒智	27212	34°35'47"	135°39'00"	990824~30- 0907-08- 17-30	貴塔立石と複数立石に伴う 遺構確認調査
とうごくまいじ 東郷廃寺	やね。 とうごくわいじ 八尾市 桜ヶ丘	27212	34°37'34"	135°36'43"	990809	赤堀付近を除く建物に伴う遺 構確認調査
なかまかいせき 中山遺跡	やね。 やねだいせき 八尾市 八尾木北 力ヶ堀 刑部	27212	34°36'37"	135°37'10"	990223- 990307	大河原化粧箱に伴う遺構 確認調査
にじごくにいせき 西都庵遺跡	やね。 にじごくにいせき 八尾市 幸寺	27212	34°38'47"	135°36'33"	990730	貴塔立石と人頭像等に 伴う遺構確認調査
ひじりいせき 東弓削遺跡	やね。 ひじりいせき 八尾市 東弓削	27212	34°30'08"	135°37'14"	990614	事例住宅施設に伴う遺構 確認調査
みずこいせき 水越遺跡	やね。 みずこいせき 八尾市 服部川	27222	34°37'56"	135°38'25"	991006	身代塗ぬ新規墓地に伴う 遺構確認調査
やねなんじゅく 八尾南遺跡	やね。 やねなんじゅく 八尾市 若林町	27212	34°35'27"	135°35'09"	990820	事例付近に伴う遺構確認 調査
所収遺跡名 種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
郡川遺跡 集落	古墳時代～ 平安時代	土坑・柱穴	須恵器 土師器			
小阪合遺跡 集落	弥生時代	包含層	弥生土器 十輪器			
成法寺遺跡 集落	縄合時代・古墳時代	包含層 土坑状遺構	瓦器 上師器 弥生土器 須恵器 不明石製品			
高安古墳群 山墳	縄文時代・中世	落ち込み状遺構 ピット 土坑	縄文土器 サヌカイ・羽片 土師器			
東郷廃寺 集落	弥生時代	土器集積 落ち込み状 遺構	弥生土器 土師器			
中田遺跡 集落	中世 弥生時代・奈良時代	落ち込み状遺構 桁列 包含層 河川堆積	土師器 須恵器 瓦器 弥生上器 上師器 須恵器			
西都庵寺遺跡 集落	奈良時代	土坑	土師器・須恵器			
東弓削遺跡 集落	奈良時代～鎌倉時代	落ち込み状遺構	瓦 土師器 瓦器			
水越遺跡 集落	弥生時代・晉和時代	包含層 溝	弥生上器 土師器 瓦器			
八尾南遺跡 集落	古墳時代	古墳	埴輪 土師器 須恵器			

八尾市文化財調査報告42
平成11年度国庫補助事業

八尾市内遺跡平成11年度発掘調査報告書Ⅰ

発行日 2000年3月

編集・発行 八尾市教育委員会 文化財課

〒581-0003 八尾市本町1-1-1

TEL (0729) 24-8555 (直通)

印 様 廣野印刷

〔八尾市刊行物番号 H11-65〕

